未完都市「高岡」の原点

第Ⅰ幕『日本百名城・国指定史跡「高岡城跡」の魅力』

第Ⅱ幕『徳川家と前田家 ― 瑞龍寺建立の謎 ― 』

第Ⅲ幕『未完都市「高岡」の原点と温故知新』

目次

はじめに…… 4
創業 70 周年記念講演会と書籍化…… 4
「高岡」の今、未完都市とは？…… 5
未完都市「高岡」の歴史的原点…… 6
創業 70 周年記念出版に寄せて…… 7
第Ⅰ幕　講演『日本百名城･国指定史跡「高岡城跡」の魅力』…… 8
国史跡「高岡城跡」…… 8
高岡城の概要…… 8
城の定義…… 9
江戸城…… 10
福山城と松本城…… 10
福井城と岡山城…… 10
金沢城…… 11
富山城…… 11
大坂城…… 12
高岡城…… 12
城郭考古学・千田嘉博氏の高岡城の評価…… 13
高岡城は名古屋城よりも理論的に進んだお城…… 13
建築史家・三浦正幸氏の高岡城の評価…… 14
関野之古図…… 14
前田利長の歩み…… 14
高岡開町…… 15
高岡の立地…… 15
「高岡」は加賀藩最後の「砦」…… 15
高岡築城頃の周辺の主な城…… 16
高岡城と大千保川…… 16
高岡市洪水ハザードマップ…… 16
高岡の地形…… 17
高岡城下町の地形…… 17
高岡台地の断面図(昭和通り)…… 18
御旅屋古図・屋敷マップ…… 18
高岡関野神社前の「桝形」(クランク)…… 18
高岡中古之図…… 19
開町時、町中に旧庄川(大千保川)の流れ…… 19
開町時の町割りや町名…… 19
高岡築城の主な流れ…… 20
前田利長書状、慶長 14 年(1609)4 月 12 日付…… 20
前田利長書状、慶長 14 年(1609)8 月 3 日付…… 21

前田利長書状、慶長 14 年(1609)8 月 8 日付 21
前田利長書状、慶長 14 年(1609)9 月 5 日付 21
前田利長書状、慶長 14 年(1609)9 月 18 日付 22
築城関係の古文書が豊富な高岡城跡 22
鍛冶丸は「桝形門」か？ 22
「桝形門」の例 23
高岡城鍛冶丸想像図 23
高岡御城景台之図、慶長 17 年写 23
高岡城の貫土橋（現朝陽橋） 24
高岡城の奇跡の水堀 24
高岡城跡南隅 25
高岡城内の看板、サイン 25
高岡城の古写真 26
江戸城跡の土塁・土橋 26
高岡古城公園樹木管理行動計画 27
高岡城跡整備の課題 27
第Ⅱ幕　講演『徳川家と前田家 ― 瑞龍寺建立の謎 ― 』 28
瑞龍寺総門は薬医門形式 28
前田家が曹洞宗に帰依 29
武田信玄と不動明王、臨済宗妙心寺派恵林寺 29
上杉謙信と毘沙門天、臨済宗國泰寺派弘源寺 30
瑞龍寺山門の山号「高岡山」 30
曹洞宗瑞龍寺と黄檗隠元 30
瑞龍寺の鉛の屋根 32
江戸城の鉛の屋根 32
加賀藩の石高、富山県側の石高 32
加賀藩の鉱山 33
松倉金山 33
長棟鉛山 34
加賀藩と三井鉱山とスーパーカミオカンデ 34
加賀藩と余剰米と北前船 35
加賀藩と五箇山と煙硝作り 36
瑞龍寺と立山連峰 37
瑞龍寺の不思議、前田利長公の位牌 38
前田家のルーツ、先祖は菅原道真 39
前田家と瑞龍寺の造営年代 40
前田、徳川、織田の血を引く前田家三代光高 41
前田利長の晩年の頃 41
京都を模した高岡のまちづくり 42
京都を模した江戸のまちづくり 42

瑞龍寺と前田利長公墓所 43
岡崎大樹寺と久能山東照宮 43
日光東照宮と三代将軍家光、そして世良田 43
徳川家の風水と前田家の風水 44
前田利常の天海大僧正封じ策 45
加賀梅鉢、星梅鉢と陰陽道、そして利休 45
瑞龍寺法堂の鳳凰 46
第Ⅲ幕　鼎談『未完都市「高岡」の原点と温故知新』 47
前田利長公、高岡城築城の思い入れ 47
前田利長公、火葬の謎 49
前田利長公、壮大な築城構想 50
前田利長公、火葬の真相？ 52
大河ドラマ「利長と利常」構想 52
高岡城跡の分かり易い整備を！ 53
利長の蒔いた種、文化、経済を活かすのは誰？ 53
おわりに 55

映像資料

「高岡古城公園 四季映像」

高岡古城公園百年会議の依頼を受け、アーキジオと富山大学芸術文化学部 辻合秀一研究室の共同研究により完成したものです。

第Ⅰ幕　講演『日本百名城･国指定史跡「高岡城跡」の魅力』

講師 仁ヶ竹 亮介 氏

第Ⅱ幕　講演『徳川家と前田家 ― 瑞龍寺建立の謎 ― 』

講師 四津谷 道宏 氏

第Ⅲ幕　鼎談『未完都市「高岡」の原点と温故知新』

仁ヶ竹 亮介 氏　＆　四津谷 道宏 氏　＆　相本 芳彦 氏

はじめに

アーキジオ会長　津嶋 春秋

創業 70 周年記念講演会と書籍化

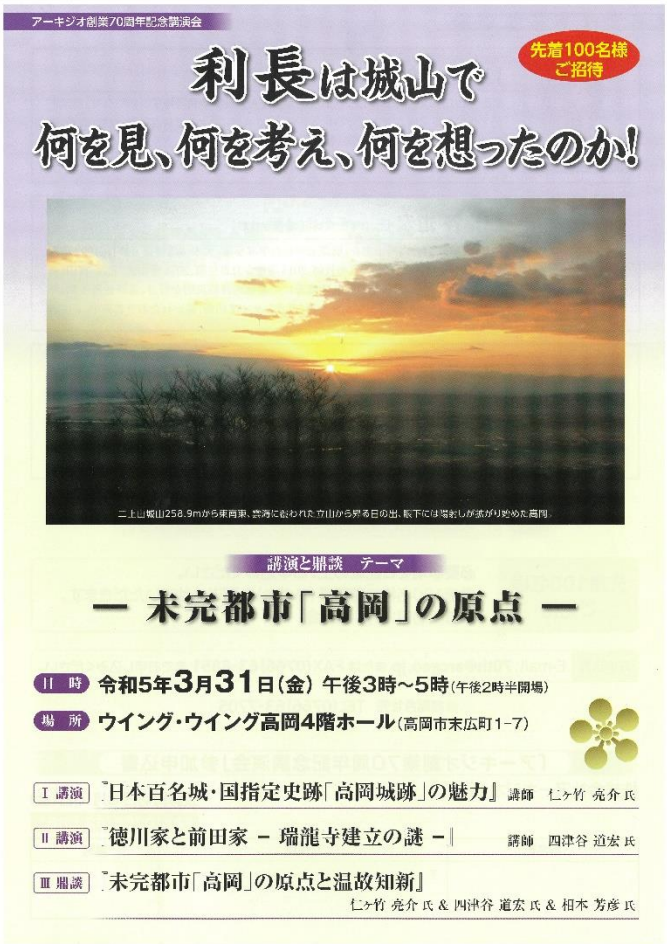
アーキジオは、本年、創業 70 周年を迎えました。創業地の高岡で 3 月 31 日、ウイング・ウイング高岡にて創業 70 周年記念講演会を開催し、多くの歴史ファンのみなさまにお楽しみいただきました。講演と鼎談のテーマは、― 未完都市「高岡」の原点 ― です。講師のみなさまは生粋のオール高岡。

先ずは、歴史家の仁ヶ竹亮介氏、高岡市立博物館にお勤めで、古文書にめっぽう強く、歴史資料を活用して高岡城や高岡町、鋳物産業史などを調査研究しておられます。

続いて、国宝瑞龍寺 31 世住職の四津谷道宏氏、落語的拝観説明が好評で、口伝的歴史観は殊のほか説得力があり、聴くものみなをなぁーるほどと唸らせます。

鼎談の要、コーディネーター役の相本芳彦氏、知る人ぞ知る名アナウンサー、高岡の歴史にも造詣が深く、高岡ケーブルテレビ「歴史都市高岡ふしぎ帖」などにご出演されておられます。

この書籍は、講師のみなさまのご了解を得て講演内容を電子化し、富山経済同友会特別顧問の中尾哲雄氏が主宰される志道経営研究所から電子書籍として出版していただくことのご了解を得ました。ご快諾いただきましたみなさまに、謹んで、心から感謝申し上げます。



「高岡」の今、未完都市とは？

高岡は、平成23年(2011)にいわゆる「歴史都市」に認定され、同27年(2015)には文化庁より「日本遺産」第一弾の認定を受け、さらに同28年(2016)に「とやま呉西圏域」6市で連携中枢都市圏構想を共有し、地方創生を推し進めています。

高岡の北側は日本海、富山湾沖には日本の重心点があります。あなたはそのパワースポットを訪れ、直に体感してみませんか！　富山湾の特徴は、日本海中央部の日本海盆まで750kmの富山深海長谷が伸び、最深部1000m超で、立山連峰3000mとの比高差が4000m、北北東へ開いた馬蹄形状をしています。それって、風水地理五訣に言う「竜穴」？　因みに、名古屋から岐阜、高山、富山、高岡、金沢、能登に至る観光ルートを、最近は「昇龍道」と呼びます。また、富山湾は世界で最も美しい湾クラブに2014年、加盟が認められました。

さて、高岡には国宝瑞龍寺、国宝勝興寺、そして国史跡高岡城跡などの歴史遺産があります。国史跡高岡城跡は高岡古城公園として、散歩道、ジョギングロード、遠足や花見、紅葉狩りといった空間を提供し、広く利活用されています。

その高岡城跡の北方、直線距離で9kmには城山(しろやま)(守山城跡)258.9mがあります。この城山と東北東に隣接する二上山(ふたがみやま)274mを二柱の神に見立てて「二神山(ふたがみさん)」と呼んだそうです。城山から更に北方には氷見海岸が見渡せ、南方には高岡市街地を越え、砺波平野が一望できます。そして、東南東60kmに立山3015mを拝み、朝陽(あさひ)が昇ります。かつて、前田利長も城山からこの景色を眺め、何かを構想したと思われます。

そこで、今の「高岡」が何故、ここに存在するのか？　地政学的な位置としては絶妙なポイントに造られた人工的な都市、西暦1609年当時の越中を俯瞰する都市として計画された新都市、それが「高岡」ですが・・・。加賀藩前田家の威信をかけ、総力を挙げて新都市「高岡」を築いた思惑や未来構想はどのようなものだったのでしょうか？　東に徳川、西に豊臣、そして、三角形の北頂点に前田、「天下、三分の計」は幻に帰しましたが、400年の時が経ち、その三角形は新幹線で結ばれようとしています。更に500年、600年、1000年と経った未来に、環日本海経済圏はどんな形になっているのでしょうか？

未完都市「高岡」の歴史的原点

高岡には二つの歴史的原点があります。言うまでもなく、大伴家持と前田利長です。

大伴家持(AD718～785)は、奈良時代の公卿・従三位中納言、武門の家系にあって『万葉集』編纂者としてあまりにも有名な方です。越中国守時代(AD746～751)、現高岡市伏木古国府(ふるこふ)の越中国府(こくふ)を中心に長歌・短歌 223 首を詠み、郷土史のランドマークと親しまれています。それが一つ目の原点、「高岡」万葉の故郷ワールドです。

二つ目の原点は、前田利長(AD1562～1614)が現高岡市古城(こじょう)に築城(AD1609)したことに始まり、未完の城郭のまま今日に至っていることです。「高岡」利長公ワールドは始まるや否や、主君が高岡で没して廃城、それ故に城下町も未完となり、歴史文化だけは庶民に受け継がれ残りました。今日の高岡の起点は、利長が高岡城の築城中に入城した日、1609 年 9 月 13 日です。

築城以前は関野とよばれていた浮島状の段丘約 150ha、ここを高岡と地名を改め縄張し、その後、紆余曲折、城跡は水濠の美しき高岡古城公園として今日まで残っています。利長は、何故、越中国府(こくふ)のあった伏木や二上山守山城跡ではなく、越中国礪波郡の扇状地扇央部の段丘上に新たに縄張りして築城したのか？

高岡城は標高約 15m内外の高岡台地(洪積層)に土盛され、本丸の最高所は約 21mあります。北の涼(あわら)境で標高約 7m、南の段丘崖で標高約 10m、西の旧庄川河道(現千保川)に至る境で標高約 7m、東は標高約 8mで後の加賀藩河川改修で新河道・現庄川を望む地形となっています。高岡台地の段丘北縁は、築城の際の水運利用には適していたようです。天守閣を見ることなく、未完に終わった古城であるが故に、利長の抱いた様々な夢物語が浮かんできます。

創業 70 周年記念出版に寄せて

富山経済同友会特別顧問　中尾 哲雄

3 月 31 日、アーキジオの創業 70 周年記念祝賀会にお招きいただき出席した。驚き、感動したのは単なるパーティーではなく、記念講演会と鼎談が催されたことである。テーマが「未完都市高岡の原点」、大変興味深く拝聴したが、津嶋君らしい素晴らしい企画であったと思う。

第Ⅰ幕は講演会。仁ヶ竹亮介先生による高岡城跡の魅力。高岡城が日本の百名城に県内では唯一選定されていること、日本の近世城郭が到達した最も合理的な名城だということをはじめて知った。

第Ⅱ幕の四津谷道宏氏のお話。徳川家と前田家のこと、興味深くお聴きした。前田家の先祖があの菅原道真だということ、本当かなと思いながら、とにかく知らないことばかりだった。

第Ⅲ幕には相本芳彦氏が加わっての鼎談、あっという間に終わった。

高岡城は未完、だから高岡市も未完。それ故、われわれが仕上げなければならない。数百年のまとめを高岡市民ひとりひとりが考え、行動して完成させなきゃならないという結論には感動した。

株式会社アーキジオは創業 70 年、いつの間にか社長も三代目に代わっていた。津嶋君とは長くというより深くつき合ってきた。会社経営に対する姿勢は「経営」を超えてと言うべきであろうか、きわめて学術的であり、いつも多くを教わってきた。地域社会のさまざまな問題に対しても深く関心をもち、氏はそれを行動に移してきた。

経済同友会活動をはじめ、例えば犯罪被害者支援、立山黒部ジオパークなど共に活動し、それらのリーダーにもなっていただいた。

これら津嶋君の活動が極めて社会的、公共的な性格の高いアーキジオ経営に大きく役立ってきたと思っている。

さて、氏はなかなかの文学者でもある。私といっしょに随想集も出しているが、終わりに氏の短歌を紹介しておきたい。

初日射し　立山覆う雲海の　心地よく飛べ　二上の鳥

70 周年を記念して『未完都市「高岡」の原点』が出版されることを重ねてお祝い申し上げるとともに、「高岡」の完成を祈ってやまない。

第Ⅰ幕　講演『日本百名城･国指定史跡「高岡城跡」の魅力』

講師　仁ヶ竹 亮介 氏

国史跡「高岡城跡」

図 1

博物館があります高岡古城公園は国指定史跡の高岡城跡です。この度は高岡城跡の魅力をお伝えしていきます。

今ほど、高岡古城公園の素晴らしい映像がありました。高岡城跡は平城であります。街中で、平野にありますお城でございます。ですから、ぱっと見でこの範囲がお城だとわかります。わかりやすいところも魅力の一つです。

高岡城の概要

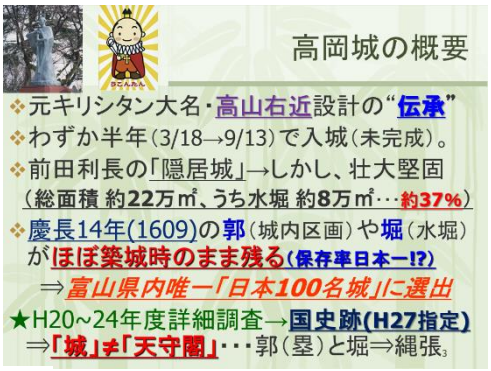


図 2

では、結論めいた概要からお話しさせていただきます。

いろいろ要素があると思いますが、日本城郭協会から認定を受ける「日本百名城」に、富山県で唯一選定されています。

その日本城郭協会の方から聞いたのですが、やっぱり、高山右近の存在と言いますか、縄張(設計)したという伝承が大きいとのことです。

近年の研究では、本当に右近さんが設計したのかどうかは、実は、少し否定的な研究が相次いで出ているのですが、何年か前に、福者という聖人に次ぐ称号をもらいました。

大変な人気で、何なら利家より知名度が高くて、日本を代表するキリシタンでありました。この右近さんの存在というのも高岡城の魅力の一つであります。

僅か半年、3 月 18 日から 9 月 13 日、1609 年に入城したその驚異的なスピード、そのため超突貫工事であったということ、更に幾つかの資料から、おそらく未完成だと思われます。

そして、利長の隠居城だとされています。利長は既に 4 年前に、1605 年に富山城に隠居しております。その後入ったお城なので、高岡城ももちろん隠居城であります。

ですが、隠居という言葉のイメージとは異なり、非常に壮大堅固な評価の高い名城であります。

近年の詳細調査によって面積とかいろいろな発見等が出てきました。面積は約 22 万㎡、その内、水堀が 8 万㎡、一昔前は 1/3 と言われていましたが 37%もあるのが特徴ですね。何と言いましても、慶長 14 年(1609)の郭(城内区画)と水堀が築城時のまま完全に残っていること、完全に 100%ですから、他の城と比較するまでもなく日本一と言っても過言ではありません。これが最大の特徴であると思います。

平成 18 年(2006)に県内で唯一「日本百名城」に選定されております。

そして、平成 20 年～24 年(2008～2012)に高岡市は詳細調査を行いまして、平成 27 年(2015)に国の史跡として指定されたということでございます。

つまり、お城＝天守ではないということであります。

高岡城には、天守をはじめとした櫓とか、土の上の建造物が一切ありません。それでも専門家が相次いで高く評価してくださっているということは、お城というのは天守ではないということです。それよりも、堀や郭などの土木工事(普請)の痕跡、総合的に縄張が 400 年間完全に保存されているというところが非常に高く評価されています。

城の定義

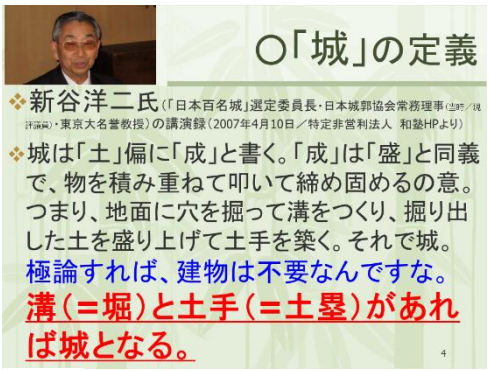


図 3

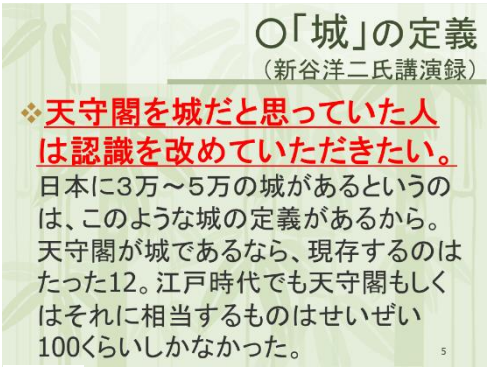


図 4

城の定義ということを改めて申し上げます。この方、新谷(にいたに)洋二先生は日本百名城に選んで頂いた時の日本城郭協会の選定委員長、お城の権威の一人でございます。

その先生が非常にすっきりはっきりと城の定義を仰っております。「溝と土手、すなわち堀と土塁があれば城となる。」

天守閣を城だと思っていた人は認識を改めてもらいたいです。実は私は、一番言いたいことはこれです。

しかし、日本のマスメディアの影響により、お城といえばパッと天守閣が思い浮かびます。あの建造物が即ち、城と思う日本人が 99%いると思うのですが、実はそうではないのです。

日本には 3 万～5 万の城がありますが、現在残っているオリジナルの天守でも 12 しかない。ならば、日本にはお城はこれだけしかないのかと言うとそうではありません。

天守閣＝城という認識を今日ぜひ改めていただきたい。

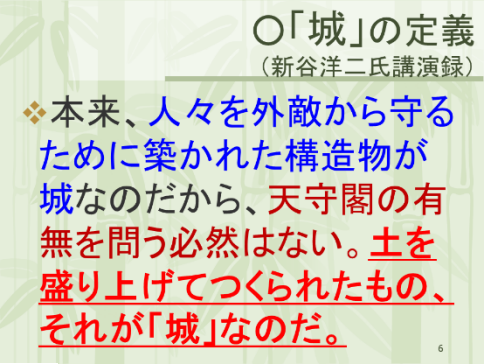


図 5

何故そんな中でも高岡城は評価されているのかを、今日は伝えていきたいと思います。

そもそも城という漢字は、土を盛る、土から成ると書きます。土を盛り上げて作ったものが城となるのであります。天守という存在は関係がないということです。

他と比較することで見えてくるものがあると思います。

江戸城

図 6

先ずは、江戸城ですね。左側（現在）の上（東）から右（南）にかけてお堀が無い部分がありますね。そして、右側（江戸時代）の東側の方にある溜池も今は無いですね。

福山城と松本城

図 7

これは福山城（広島県）と松本城（長野県）ですね。

松本城は天守が国宝になっています。実は水堀の保存率を見ると、この濃い水色の部分が現在残っている部分で、今、2割あるかないかって感じですね。

左側の福山城なんてもうありません。薄い水色の所は江戸時代にあった水堀で、現在、全て埋め立てられているということですね。

福井城と岡山城

図 8

福井城と岡山城も同じですね。

福井城は本丸に綺麗な水堀があるのが有名ですが、もう二重、三重、四重、五重の水堀まで本当はあったと、それが埋め立てられています。

岡山城も同じで、本丸水堀を除く水色の所が今では埋め立てられています。

金沢城

図 9

金沢城では沢山埋め立てられております。内惣構え、外惣構えは用水化してほぼ原形はありません。内堀だけ見てもほぼありません。

一番大きくてわかりやすいのが百間堀ですね。金沢城最大の水堀と言われていました。石川門方面へ行くとき陸橋を渡りますよね、その下に車がバンバン走っておりますよね。あれはもともと水堀だったんですが、今は埋め立てられてしまっています。

でも、金沢城、石川県が素晴らしいのは、水堀の素晴らしさ、重要性をしっかり認識しておられることです。平成 22 年に、右側(現代)の図の左(南)に黒い点々で囲んでおりますが、いもり堀という水堀を少し復元されました。

富山城

図 10

富山城ですが、今はお堀は郷土博物館のすぐ下にありますけども、濃い水色の所でありますが、オリジナルはもっと広大な水堀を持っていました。特に三の丸堀、市民プラザとか、あの辺りが大手門になります。総曲輪っていう地名がありますよね。あの総曲輪の曲輪は郭、城内っていう意味です。あそこまでが三の丸堀だったんです。で、広大な範囲の堀があった。それが埋め立てられてしまった。

富山城がすごいのは、左上の地図を見ますとその三の丸堀から何倍も広大な、右下、寺町、梅沢町辺りから左下、布瀬町まで囲うような空堀、土塁など、所謂、総構え、町全体をお堀や土塁でしっかり囲うように、総構えがしっかりなされていたということですね。

これが恐らく、利長ですね。当時の江戸前期の大名の、慶長の常識的な町づくり、城づくりがこのような状況であったと思われます。

大坂城

図 11

そして、大坂城。お城にとってお堀、水堀がいかに大事であるかを考える時に一番いい教材です。

左側が、大坂の冬の陣と夏の陣の布陣図です。冬の陣の時、家康は城攻めが苦手ですから、城を取り囲むことしかできなかった。当時は大砲の時代ですから、バンバン打ちかけますと偶然、偶々（たまたま）、天守に当たってくれたということなんです。豊臣側がビビって講和に持ち込んだと。通説ではその講和の条件として外堀だけ埋め立てていいよ、とのことだったのですが、そこは家康の政治力、内堀も埋め立ててしまって、大坂城は裸城になってしまった。こうなるといかに立派な天守があろうがなかろうが籠城できず、大坂方は外に出なければならなかった。そして、左下布陣図の野戦の形になったのであります。野戦と言えば家康が最も得意とするところです。しかし、それでも死にそうな目にあったらしいのですが、お城に関係なく野戦に持ち込めたということです。

従って、水堀があって初めて城攻めとなり、お城の効力が発揮されるのであります。

そして、右図の下（南）に真田丸の跡があります。真田信繁（幸村）が造った、所謂、馬出（うまだし）というお城の出入口の一つの形式です。最適解とされる形なんですが、やっぱり戦を知っている男ですから、大坂城の一番弱点のところに造った訳ですね。大坂城は上町台地という舌状台地の長細い台地の先にありますから、南が弱点です。空堀が掘ってありましたが、やはり南が弱点であるということで、真田丸を造りました。非常に独立性の高い馬出（うまだし）でありまして、前田家などが非常に手痛い目にあったとされています。

高岡城

図 12

では、高岡城を見ていきましょう。如何でしょうか。もう、しつこいくらいお城の例を出しましたが、右下が江戸中期、左下が明治初期、上が現在の解説看板であります。これを重ね合わせるとぴたりと当てはまります。特に、上の図は我々市民は見慣れており、なんでもないような形に見えます。

でも、これが如何に奇跡的な事なのか、すごい事なのか、少し分かっていただけたでしょうか。本当にすごい事なんです。内堀だけでなく、外堀まで完全に残っている。高岡城の場合は、幸か不幸か、町全体を囲うような総構えはなかった。それを差引いたとしても、この内堀、外堀が完全に残っている。1609 年の築城以来、完全に残っているということが如何に素晴らしいか、奇跡的な事かを、今日言いに来ました。

城郭考古学・千田嘉博氏の高岡城の評価

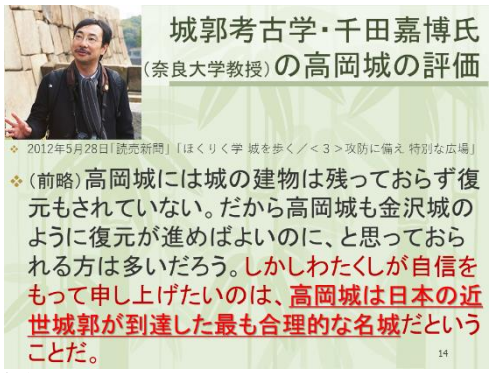


図 13

それをさらに補強するために、お城の日本一の権威である千田嘉博先生、今度 4 月 8 日に高岡に来られますけれども、その先生も高岡城を高く評価しております。高岡城は日本の近世城郭が到達した最も合理的な名城だということだと。

先生が評価しているのは馬出（うまだし）というものであります。馬出とは何ぞやと言いますと、城の出入口の堀の外側にある、堀や土塁で区切られた陣地のことであります。

これが何故かわかりませんが、時代や東西を問わず、地域に戦乱が激しくなると人類は馬出に到達するんだそうです。馬出に到達した時点で、その城は最適解、最強と言ってもいいんですけども、その段階に到達すると、先生が仰っています。

高岡城は名古屋城よりも理論的に進んだお城

図 15

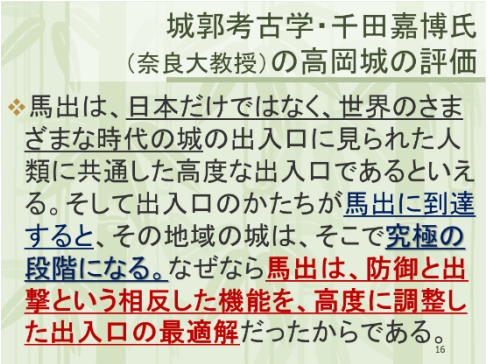


図 14

これは名古屋城です。名古屋城も天下の名城とされる最強のお城なんです。けれども、高岡城は名古屋城よりもさらに理論的に一歩進んだお城であるとされています。

先生は続けて、馬出は防御と出撃という、相反した機能を高度に調整した出入口の最適解であると。

利長は名古屋城の設計をさらに進め、本丸を取り巻く郭がすべて馬出として機能する理論的な城として、高岡城を築き上げたということであります。

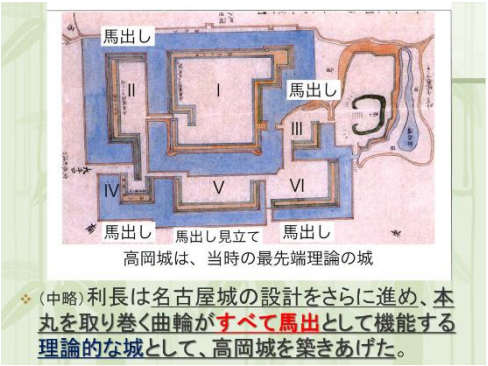


図 16

ですから、本丸から見たら、二の丸（Ⅱ）は馬出な訳であります。堀で区切られた外にある郭、陣地でありますから、二の丸から見れば、博物館のある郭（Ⅳ）も馬出にあたる訳ですね。それぞれの土橋の通路を非常に狭めて、堀をぐっと両側に突き出して、細い土橋の先にある小さな郭ですから馬出です。本丸の北側に今は梅林と呼ばれている、Ⅲと書かれている場所も馬出。そこから見ますと、小竹藪も馬出。梅林から見ると、三の丸（Ⅵ）も馬出なんですね。明丸（Ⅴ）だけは本丸から出入口がありませんから、厳密には馬出ではありませんが、それぞれ非常に細い土橋で連結されておりまして、馬出と見立てることが出来ると仰っているんです。

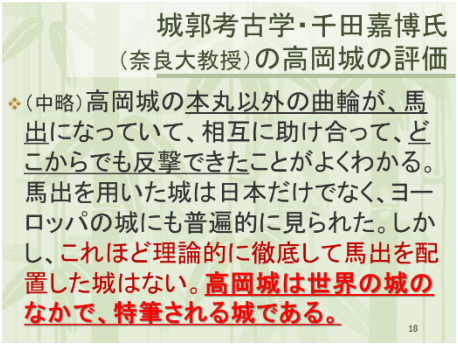


図 17

つまり、本丸以外の郭はすべて馬出だと、最強とされる馬出が連続しているということで、高岡城は単に水堀の保存率だけではなく、設計上も素晴らしいということを日本の権威が仰っている。これほど理論的に徹底して馬出を配置した城はない。高岡城は世界の城の中でも特筆される城であるということで、日本だけでなく世界まで行ってしまいましたが、非常に高い評価を頂いているといことがお判りいただけたと思います。

建築史家・三浦正幸氏の高岡城の評価

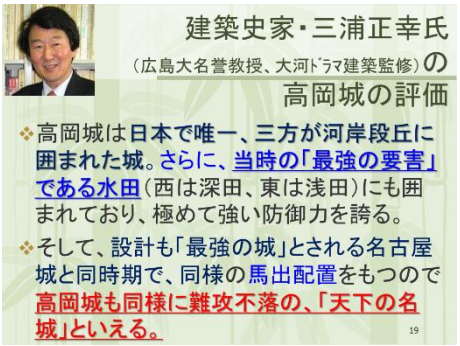


図 18

更にもう一人の権威である三浦正幸先生。この方は大河ドラマで 2 回建築監修をされている方で、建築の権威であります。この方も高岡城を高く評価していただいています。

この方が言うには、高岡城は日本で唯一、三方が河岸段丘に囲まれた城。更に最強の要害である水田に囲まれているということを言及しておられます。馬出についても高岡城は難攻不落の天下の名城と言えるということを仰っていただいております。

関野之古図

図 19

「高岡」以前の絵図というと、この「関野之古図」という物しかありませんが、これをよく見たら、地形や地名とか、非常に信憑性が高いという研究がなされているものです。ここに、利長は「高岡」を造った訳なんですよね。

前田利長の歩み

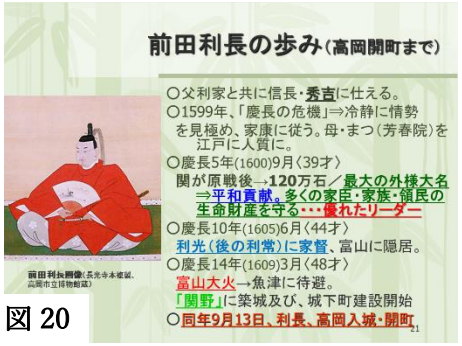


図 20

利長の 53 年間の人生から見ますと、1609 年というのは本当に人生の最晩年ですよね。しかも、それには偶然的な面があって、慶長 14 年(1609)、48 歳の時、3 月 18 日に富山大火が起こっている。起こったから、高岡に造ったとなりますので、もし富山大火が無かったら、高岡の「た」の字もなかった可能性が高いんですよね。ですから、「富山大火」、「歴史の偶然」、「ロマン」と言いますか、そういうものを感じます。

しかし、3 月 18 日の大火のすぐ後に、4 月 6 日付で家康から許可を貰っているんですよね。当時、勿論、馬を走らせたでしょうが、そのスピードがあまりにも速いということで、もしかしたら富山大火が無くても、高岡に何らかの物を造ったのではないかと言う人もいらっしゃいます。

高岡開町

図 21

ということで、1609 年に高岡開町ということでありますが、本当に高岡の生みの親そのものといった人で、全く何もないような原野にお城と城下町を造り、高岡と名付けたのも、利長です。そして、町人たちも勿論呼んでこないといけませんから、銅器産業の基となる鋳物師を高岡市戸出の西部金屋から呼んでくるなどして、沢山の人たちを呼んできました。

ですが、5 年後に利長は没してしまいました。さらに、翌年の一国一城令により高岡城は廃城となる歴史を辿っております。

高岡の立地

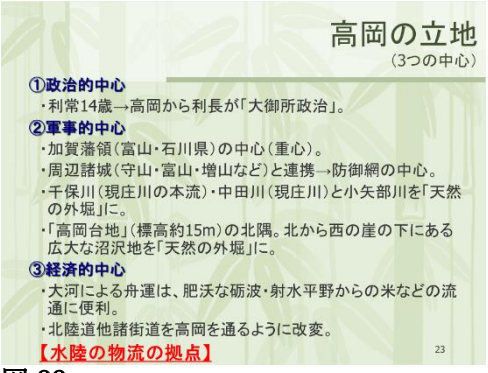


図 22

高岡になぜ造ったかという資料が無いのですが、状況証拠といいますか、後世からの歴史から見て考えられますことは、次の 3 つ。

1 番目の政治的中心というのは、利長は隠居しておりましたが利常はまだ幼少ですし、当時、前田家は真っ二つに派閥が分かれていました。高岡から色々政治を指導しなくてはならない時代であったので、政治的に高岡が中心になりました。

2 番目と 3 番目が重要で、2 番目が軍事的中心地になり得るのではないかということです。高岡は加賀藩領の、今の石川県と富山県の中心、重心に当たります。周辺のお城とのネットワークを組んだら、防御面の中心になり得る訳であります。

そして、千保川は当時の庄川の本流である通称「大千保川」で、非常に大河であり、お城のすぐ西側を流れていました。今の庄川である、中田川や大門川と呼ばれる川のほか、小矢部川もありました。何よりすぐ北に涼(あわら)という地名が残っておりますけれども、洪水が起こるたびに水がはけ切らない、ぐちゃぐちゃの原野、広大な沼地、湖と言いますか、水が残りやすい地区がありました。こういうところを天然の水堀として活用できました。

そして、3 番目の経済的な中心地として、高岡が日常的に回転するように配慮したということです。これは当時の物流の主役である水運、大河による舟運、そして陸の路を整備しまして、水陸両用の物流の拠点として高岡が経済的に回転するよう配慮したということであります。

「高岡」は加賀藩最後の「砦」

高岡は加賀藩の中心です。これを円で囲みますと丁度中心、やや右側に偏っていますが、加越の国境に山がありますから、その辺を考えますと大体真ん中にあたります。

金沢は西に偏っている面があるんですよね。金沢というのは一説によりますと、守りに不安点があり、弱点があるとされています。

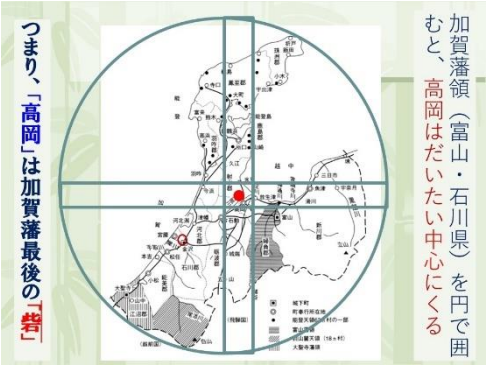
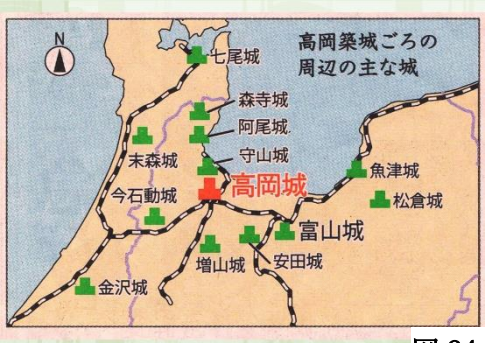


図 23

金沢も小立野台地という舌状台地の先端にありますが、北東の方には卯辰山が迫っています。この不安な要素は利家時代から危惧していたんですよね。

もしも、金沢が落ちたならば、ということで、高岡というところを考えたんではないかと思われる訳です。つまり、東西南北どこから攻められても、加賀藩前田家の最後の本丸、砦になり得るような立地をもっているということですね。

高岡築城頃の周辺の主な城



北日本新聞社「高岡開町400年新聞」創刊号（平成21年1月17日付）

図 24

これは高岡城周辺のお城のネットワークは強固であるという図なんですが、これらの城は本当に一部だけであります。越中には3,000～5,000ものお城、中世の城館も含めてありました。それらの中心地たり得ると考えられていたんですね。

高岡城と大千保川

1-12. 関野之古図(写)　明治期

図 25

これは先ほどの古図ですが、この中の青い四角に高岡城があります。この北から西に広大な沼地、湖があって、これをお城の外堀として活用したんではないかと思われます。

これが大千保川と通称しております、庄川の本流時代の千保川。治水工事をまともにしていませんから、本当にぐちゃぐちゃの網目のような流れをもっておった訳ですね。

高岡市洪水ハザードマップ

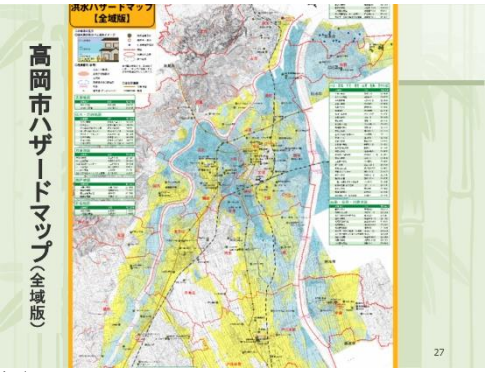


図 26

図 27

ハザードマップです。これは古いバージョンですけどね。私、古いバージョンの方が好きでしてね、水がちゃんと水色で描かれていますから、分かりやすくていいですね。

この真ん中に流れております旧庄川、大千保川であります。地区版はアップした図ですが、真ん中の白いところが高岡台地でありまして、お城が建っている台地であります。

図 28

平城ですが、標高 15m前後の長細い台地がありました。そこの一番高いところにお城を作ったのですが、西側が大千保川と呼ばれる流れ、東側が今でいう庄川で、一旦洪水になりますと、まるで浮島のように台地が浮き上がっているような地形です。

これはずっと古来より旧石器とか、そんな時代からあった地形です。左図は想像図ですが、北(右側)から西にかけて広大な沼地があった。ですから、本丸の西側には一重の水堀しか作らなくてよかったと。守りが不安だったのはむしろ東側や南側なんですね。だから、二重の水堀で配慮したという絵図であります。

高岡の地形

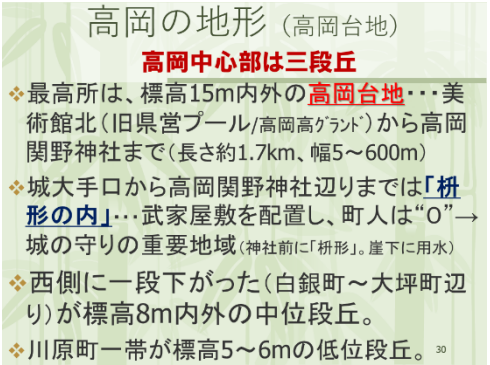


図 29

高岡の中心地は、段丘というほど段差がある訳ではないんですが、一応、三段階になっております。最高所は高岡台地で、標高15m内外。お城を作る時は 5mくらい土盛しておりますから、今では標高 20 数mあります。美術館の北、旧県営プール、もしかしたら高岡高校のグラウンドを含むかと思いますが、あそこから高岡関野神社まで大体 2 km位で幅 500～600m位の長細い地域が高岡台地です。

高岡城下町の地形

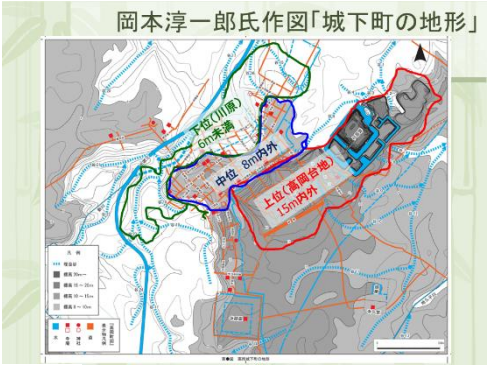


図 30

そして、城の大手口から高岡関野神社辺りまでは「升方の内」と申しまして、僅か 5 年間だけなんですが、武家屋敷がありました。しっかりした住宅地図のような絵図も残っております。町人はゼロで、幕末までずっとそこに人を住まわせませんでした。ですから、七本杉をはじめ、ずっと暗澹としておりまして、一説には天狗が出ると言われるまで、おどろおどろしいエリアだったはずなのです。

西側に一段下がった所が所謂、初期の町家、山町筋ですね。白銀町から大坪町までが標高 8m内外の中位段丘にあたります。

庄川の治水工事が 1714 年に終わり、今のように細い小さい川になりました。そうしますと川原地区に人が住めるようになるんですよね。人口の増加に伴って、人の住める地域が広がっていきました。そういう訳で川原町一帯が標高 5～6mの低位段丘です。

高岡台地の断面図（昭和通り）

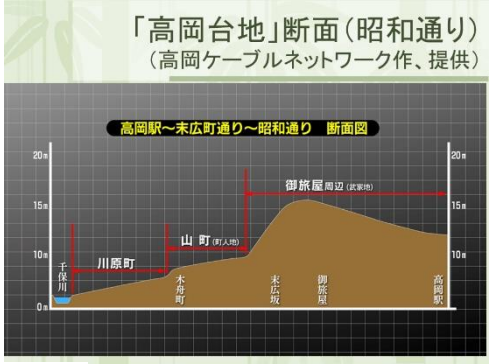


図 31

そんな三つの段丘、高岡台地、中位段丘、川原地区、これが一番低いとこですね。こういう風な三段丘を持っております。

この地形をお城、そして城下町全体の防衛に利用したんではないかと言われている訳です。でこれが断面図ですが、三つの段丘を持っているとわかります。

御旅屋古図・屋敷マップ

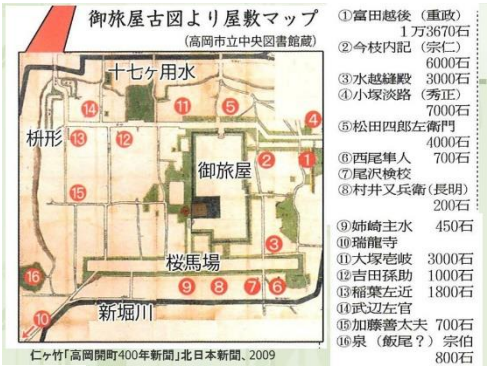


図 32

これは住宅地図のような細かい絵図ですが、図書館にあります「御旅屋古図」という絵図です。細かい文字で見えにくいですが、上級家臣の名前が書いてあるんです。5 年間だけですけど高岡に武家屋敷があったんですよね。

特に利長の書状の中に城に近いものほど俸禄の高い家臣を置けとあるんですが、この右側が高岡城なんですが、1 番富田越後 1 万 3670 石とか、4 番小塚淡路 7000 石とか、その利長の書状通りお城に近いところに俸禄の高い家臣が居ったということなんです。

高岡関野神社前の「桝形」（クランク）

図 33

高岡台地の南側の高岡関野神社の参道ですが、その地形が今でも残っております。クランクとかも残っております。

特に右側の方に、先ほどの「御旅屋古図」の左上に L 字状の土塁を二つ造って、「桝形」（クランク）を敢えて造っていました。高岡台地の入口が、何なら高岡城の入口という認識があったくらい結構力を入れて、防衛構造を造っていました。

一説には、築城時にここに高岡関野神社の前身の一つの熊野社があったが、枡形を造るから今の神主町に移したという説があります（1806 年、再び現地に遷座）。

その地形、クランクは今でも残っております。一番左の写真、左側、高の宮通りでありますね。神社の参道に向かって階段を上らずに左へ行きます。行きますとすぐ右へ曲がりますね。突き当り、左側を向きますと宮田の鯛焼きがあったところ、そこに行くまでにクランクが残っているんですよね。それが今の地図でもはっきりと分かります。

高岡中古之図

図 34

そういう城下町としての防衛の仕掛けがですね、今でもしっかりとたくさん残っているんです。高岡というのは幸い戦災にあっておりませんから、江戸時代の絵図が今でも使えるんですよね。こういう町は非常に奇跡的で素晴らしいことなんです。例えば、瑞龍寺に向かって左側、細い路なんですがクランクがしっかり残っています。江戸時代以来の防衛ラインであります。東西南北に桝形があります。そして、お寺を並べ、崖の下に用水を通して防御を高める、防衛ライン二つありますし、真っ赤な丸いところは鍵の手、Ｔ字路、桝形とか、鉤曲（カーブ）ですね、そういう江戸時代の名残が残っている。そういう町であります。

開町時、町中に旧庄川（大千保川）の流れ

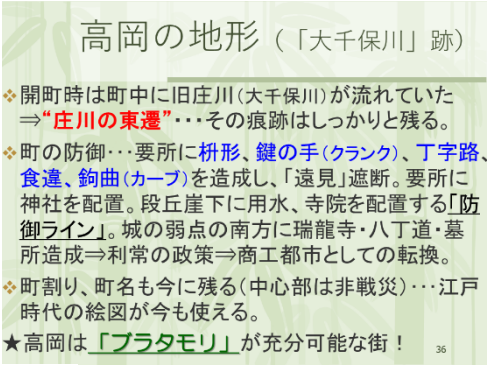


図 35

庄川の東遷と呼ばれますが、庄川は古代から近世にかけて現在の合口ダムや庄川水記念公園のあの辺りを「扇の要」として、東遷ということで東に川の流れを変えている。高岡城を造る時、今の千保川がメインのルートでありました。

開町時の町割りや町名

更に、町割りや町名が残っていますね。町名、旧町名の復活運動が少し前に行われていまして、2 町名、復活しました。今は一旦休止している感じなんですが、もっとどんどん再開してほしいなと思っております。

ああいう、一見、何の役にも立たないような事を一生懸命頑張る、これこそが文化だと思っていますが、そういうことを一生懸命やると、みんなの一体感というか郷土愛というか、そういうのが盛り上がりますので、復活していただきたいと思います。

つまりは、そういう地名とか地形とかいろんなものが残っているということは、ブラタモリが今でもできる町ということですよね。是非、是非、どなたか、ＮＨＫとツテがないですか？　タモリさんに来ていただいたら、高岡は全国的な観光地になり得ると思います。段差もしっかりありますしね。

高岡築城の主な流れ

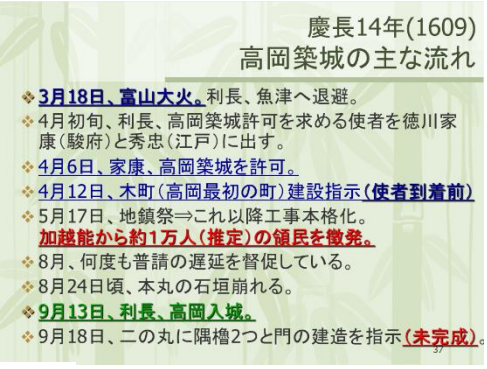


図 36

高岡築城の流れということで、日を追うように色々書いてありますが、これは利長の書状がたくさん残っているから書けることなんです。何月何日何があったか。この史料の多さ、特に、利長の書状というのは、一次史料、同時代史料と言いまして、学術的な価値が一番高いんですよね。それがたくさん出ている。他のお城、富山、金沢よりもかなり多いと思います。これが高岡城の特徴であります。

1609 年 3 月 18 日、富山大火があって、9 月 13 日に入城したんですが、4 月 6 日に既に家康から許可を得ているんですよね。

4 月 12 日に高岡の 1 番目と言いますか、0 番目と言いますか、最初の町である木町を造ったと。

5 月以来、色々な領民を動員したということであります。

8 月当りに、もうここの普請場所はないという書状がありますから、半年とはいえ、実際の工期は 3 ヶ月位なんですよね。

本当に信じられませんが、現場の人はたまらんかったと思います。利長の書状はほとんど督促状だったんですよね。早くせいとか、奉行が最近たるんでいると聞いているとか、ちゃんと現場に出るように言えとか、ほんとに利長は細かくてせっかちで短気と言われてますけど、それほど利長は自分の拠点を一刻も早く欲しかったと伺えるのであります。

前田利長書状、慶長 14 年(1609)4 月 12 日付

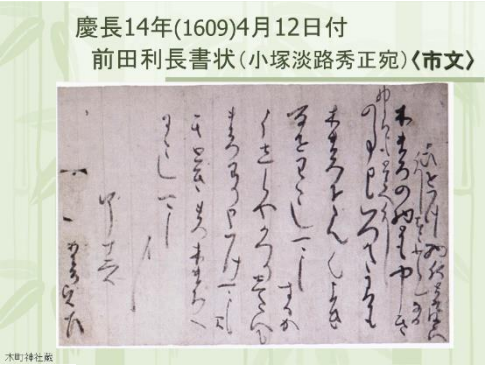


図 37

具体的にいくつか紹介していきます。これは 4 月 12 日の木町文書でありまして、木町を建てるのを許可した文書であります。

木町の商人たちが望むところに町を立てさせて、土地を与えよ。駿河より使者が帰り次第に町割りを申し付ける。最初に木町へ渡す。ということであります。駿河には大御所家康がいました。

4 月 6 日に家康の許可が出て、往復で 11 日間、宮崎蔵人という使者が往復したということが分かっているんで、これが 12 日時点で、使者が帰り次第と書いてあります。着いていなくても具体的な指示を出しておる訳なんですよね。だから、本当のところ、徳川、何するものぞという思いがあったのかもしれませんが、こういう具体的な史料があるのは非常に面白い。

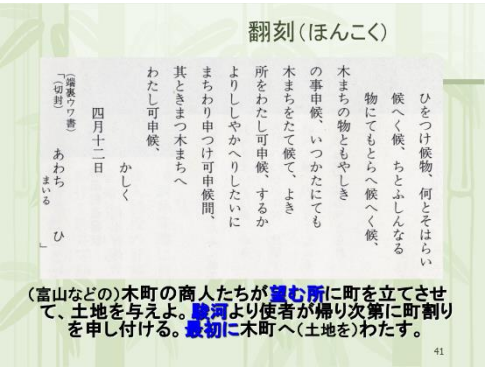


図 38

前田利長書状、慶長 14 年(1609)8 月 3 日付

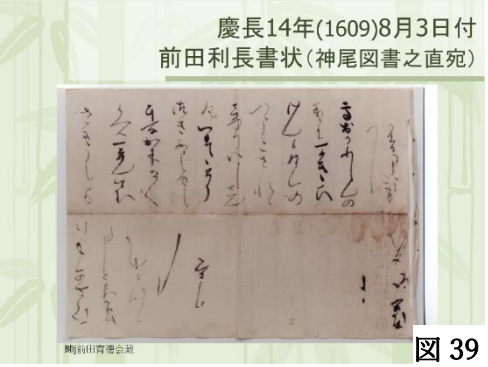


図 39

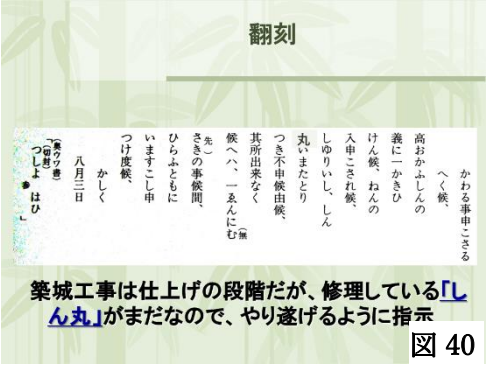


図 40

8 月 3 日付では、築城工事は仕上げの段階だが、修理している「しん丸」がまだなので、やり遂げるように指示してあります。

前田利長書状、慶長 14 年(1609)8 月 8 日付

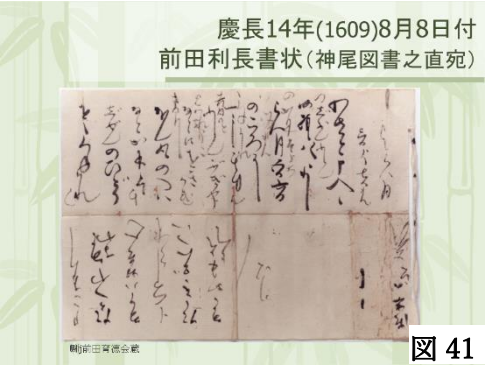


図 41

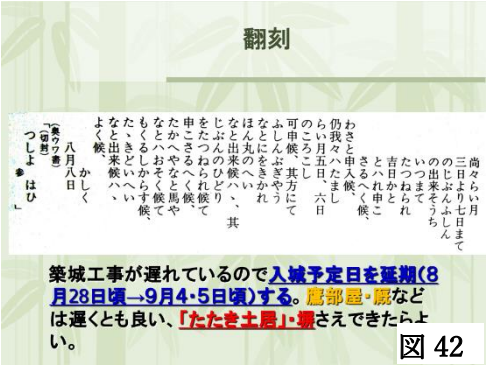


図 42

8 月 8 日付では、築城工事が遅れているので入城予定日を延期すると。8 月 28 日ごろの予定だったのを 9 月 4、5 日にすると。鷹部屋や厩は遅くても良い、「たたき土居」、塀さえできたらよいという具体的な指示であります。

高岡城は今、土の上の建造物は何もないと申し上げましたが、この鷹部屋や厩など具体的な内容が書かれているので、これはあった可能性が非常に高い訳です。

「たたき土居」というのは、いわゆる石垣ではない土塁のことであります。今も一部残っています。土塁とか塀とか防衛にかかわるような一番大事なポイントを優先せよという指示を出していると思われます。

前田利長書状、慶長 14 年(1609)9 月 5 日付

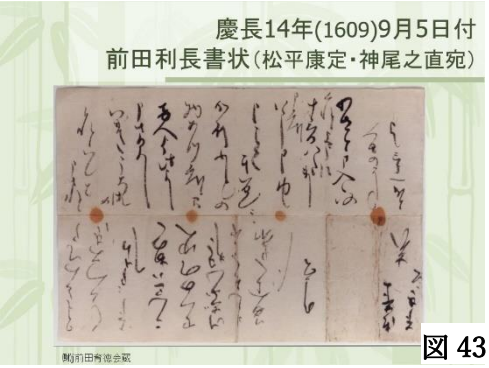


図 43

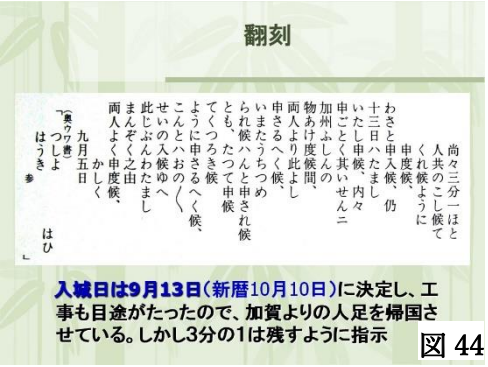


図 44

9 月 5 日付では、入城日は 9 月 13 日に決定し、工事も目途がたっているので、加賀よりの人足を帰国させる。しかし、3 分の 1 は残すように、指示している書状です。

前田利長書状、慶長 14 年(1609)9 月 18 日付

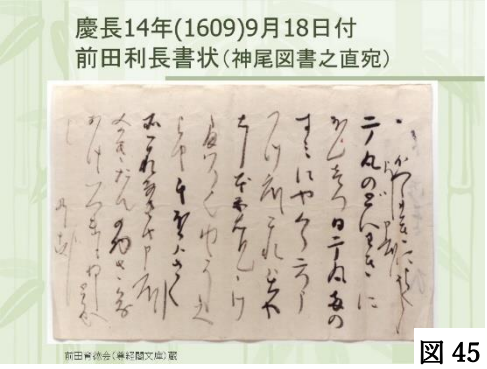


図 45

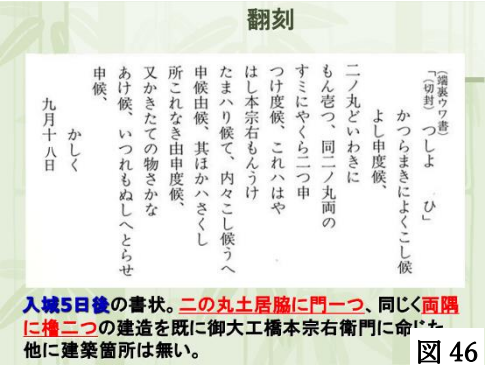


図 46

9 月 18 日の書状では、入城 5 日後の書状です、二の丸土居脇に門一つ、同じく二の丸両隅に櫓二つの建造を既に御大工橋本宗右衛門に命じた。他に建築箇所は無い、とあります。

二の丸は市民会館があった郭でございます。そこの門でありますから、おそらく博物館のある鍛冶丸から二の丸に行く土橋を渡ったところであります。利長自らの書状が残っておりますから、門があった可能性が高いですね。

両隅というのは角が三つになりますから、どこか分かりませんが、恐らく外側に向けたところ、門から見て左上と左下あたり、外側に向けたところに隅櫓があった可能性が高い訳です。

築城関係の古文書が豊富な高岡城跡

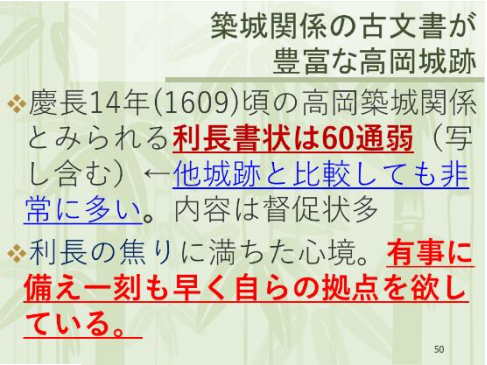


図 47

このような豊富な築城の古文書が高岡城跡の特徴であります。写しも含めますと、50 何通ないし 60 通弱もあると思います。これはかなり多いと思います。というのは、利長の、有事に備え一刻も早く自らの拠点を欲しているという、心境を表しているのかなと思います。

この中に、高山右近の「た」の字もありません。歴史学上は、一次史料、同時代史料を最も重視しますから、ここに、何か右近に聞け、とかいう利長の文言があればいいんですが、一切ありません。寧ろ、利長自らが強力なリーダーシップでお城の築城、城下町の造成を進めています。そういう意味でも、右近縄張り説には？マークが付いております。

鍛冶丸は「桝形門」か？

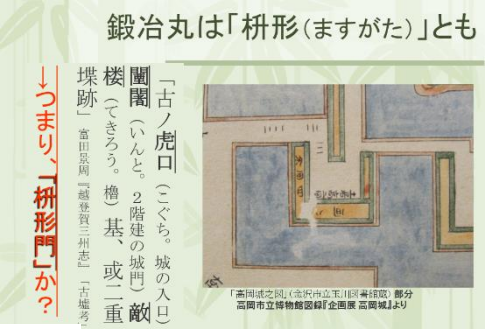


図 48

城内に関してもう少し詳しく説明しますが、まずは博物館がある鍛冶丸であります。今は失われております土塁が二の丸方向から伸びているんですね。鍛冶丸の中央から博物館本館(旧美術館)の入り口辺りまでかなり長い土塁が伸びております。あれがあるおかげで本丸方向に行くときに、何度も直角に曲がらないと本丸に行けないんですよね。あの土塁が一本あるだけで大変なんですよ。

これだけの桝形、強力な防御力、出入口の仕組みがありますが、更にですね、後世の史料に、富田景周という人が書いた『三州志』という史料によりますと、「古ノ虎口闔闇敵楼基、或二重堞跡」ということを言っております。つまりですね、二階建ての城門、櫓門とか、あとは二重の堞、柵だと思いますが、そういう防衛のいろんな建造物があったという記述もあるんですね。

つまり桝形門があったのではないか、という想像が成り立つ訳です。

「桝形門」の例

図 49

桝形門は何ぞやと申し上げますと、金沢城石川門がその典型であります。石川門というのは、先ほど言いました百間堀の陸橋を渡りますとはじめに非常に小さい一の門（高麗門）があります。その門に入りますと桝形という四角のスペースがありまして、正面と左側に石垣があります。そして、右側に二階建ての大きい櫓門があります。これらが桝形門の形式なんですね。

近世城郭と言われるもののほとんどはこの桝形門を備えております。最強の門の形とされていますので、みんなこれがいいと採用されていったんですよね。小田原城とか、駿府城とか、四谷見附とか、東京にはなんとか見附跡とか、そういう門がたくさんあります。

高岡城鍛冶丸想像図

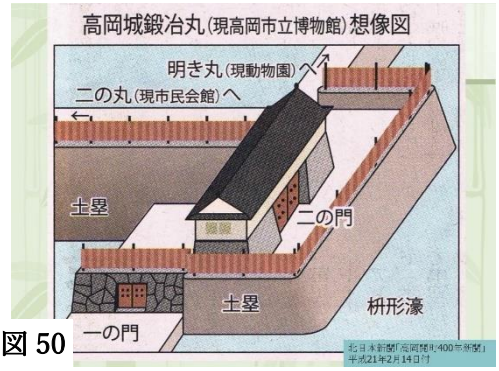


図 50

想像を逞しくしますと、博物館があった郭には桝形門があったと思われます。だから周りの堀には、桝形堀という名前が付いてるのではないかと思う訳であります。

高岡御城景台之図、慶長 17 年写

図 51

図 52

築城 3 年後の、唯一、城が現役時代の慶長 17 年の絵図がこちらです。

これちょっと見にくいので、写しと、同じ内容が書かれている塚本家文書と言いまして中川村

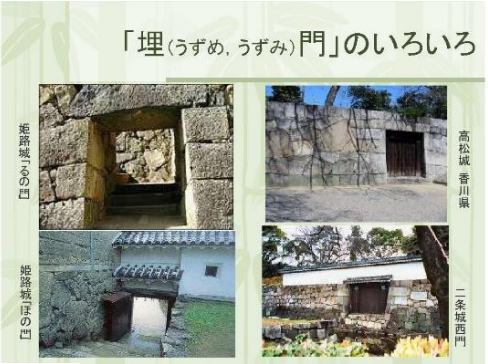


図 53

の十村南家の手代をやっておられた家にあるんですが、それらを総合的に見ますと、一の門には埋門(うずみもん)があったんではないかと思われます。

埋門とは何ぞやと言いますと、石垣とか土塀とかにあけられた、うずくまったような小さい門のことです。

高岡城の貫土橋（現朝陽橋）

図 54

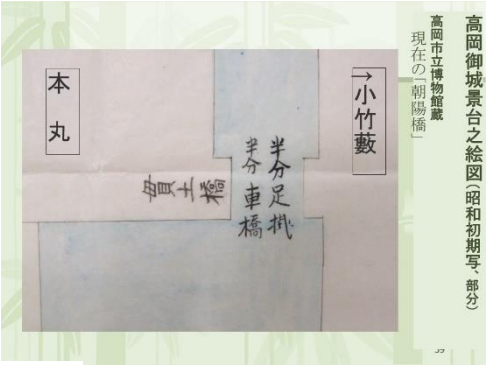


図 55

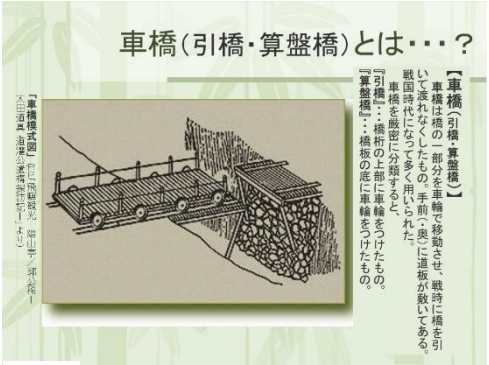


図 56

塚本家文書の本丸部分の記述なんですが、ここに貫土(かんど)橋（現朝陽橋）があったのではないかと。貫土橋というのは、「半分は足懸け、半分は御用之刻(みぎり)、車にてお懸けなされ」とあり、絵図にも文字ですが表現がされています。

具体的には右図のような橋ですね。車橋、引橋、算盤橋とかありますが、高岡城にはもしかしたらこういう物があったという記述がある。これは全国的に復元された例がありませんので、一つ、何か今の時代、ＣＧとか、ＶＲとか使って復元していただきたいなと思います。

高岡城の奇跡の水堀

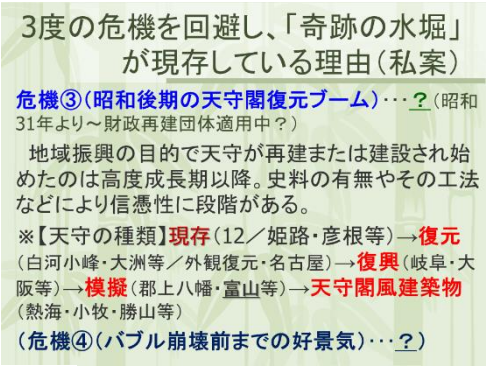


図 57

ここからは時間が押してきましたのでざっくりと端折りたいと思います。私が一番言いたいところはこちらになります。

高岡城のお城としての素晴らしさというものが、全く知識がないような子供とか観光客とか、知識ゼロの状態で、今の古城公園に行っても全然伝わらないよということです。看板もありませんし、樹木が異常に繁茂しておりますから、一番売りである水面も見えませんし、なかなかそういうのが分かり辛いところであります。

高岡城跡南隅

図 58

これは南の隅です。私もこの辺りに住んでおりますから、毎朝ここを通るんですけども、まずはツツジであります。ツツジがしっかり角を揃えてカットされ、お金をかけてわざわざ一番大事な堀の水面を見えなくしているんですよね。特に、車からは一段下がりますから、余計見えません。

富山城は、水堀の上に石垣がそびえておりますから、車に乗ってても信号待ちの時とかに見えます。富山には城があって、高岡には無いというイメージが出来てしまうんですよね。

高岡城は特にこちら側のお堀の水面は低いんですよね。ですから、尚更見えにくくしているんです。さらに木が鬱蒼としておりますから、ジャングルのような印象しかないんですよね。お城があるよということに気づかない人もいるんじゃないか、ということであります。

高岡城内の看板、サイン

図 59

そして城内の看板、サインも少ないです。

特に一番言いたいところはですね、明丸、動物園のある郭なんですけど、この鎹(かすがい)状の、ホッチキスの針状の土塁が、黄色いところが土塁なんですが、これが今ほぼ 100%完全に残っているんですよね。実は、動物園舎の裏にありますから見づらいんですけども、逆に、動物園舎が奥の存在を隠して保存してくれたと思うんですが、両端の部分が見えるんですね。これが上の写真であります。

ですが、看板がありませんから、あれが築城以来、1609 年の貴重なお城の遺構だと気づく人は、まあ、いません。99%の人間が、ただただ横を通り過ぎるだけです。

ですが、全国の素晴らしいお城の整備例として、例えば千葉県の佐倉城(写真内の右下)なんかは、土塁にはちゃんと「土塁」の看板があるんです。これを早急に作っていただきたいなと思います。

これだけ口を酸っぱくして説明しないと、高岡城の価値が伝わらないっていうことが、とても残念です。あれだけ、専門家から高い評価を頂いているのに、もったいない事限りないんですよね。ぜひ、看板を増やして頂きたいですね。

高岡城の古写真

図 60

図 61

図 62

高岡城は、磨けば、もっともっと光る原石なんですよね。その一つのモデルとして、古写真、近代の古写真が大いに参考になると思います。

図 60 は先ほどの図 58 と同じ南隅の古写真です。土塁とか、郭とか、土橋の法面に木が少ないですよね。水面から法面が見えたんですよね。非常に「城感」、お城らしさを感じますよね。

せめて、この時代に戻してほしいですね。こういう古写真がたくさんあります。

図 62 では石垣も見えます。今では、石垣見えてないでしょう。石垣の看板も近年、腐って撤去されましたし、高岡城の石垣っていうのは土橋の両面にしかありませんから、何なら石垣の存在に気付かない人もいるんですね。

昔はこうやって歩いていたら前方に石垣が見えたんですよね。そういう状況をぜひ復元していただきたいですね。

江戸城跡の土塁・土橋

図 63

これは江戸城であります。半蔵門辺りの西側方面ですね。実は土の城で、土塁が結構残っています。このように土塁の法面がきれいに見える城は全国にあります。

例えば、富山城もこのように土塁の法面がしっかり分かりました。川の土手のようにすっきり見えています。

左下の写真は土橋ですが、高岡城には七つの郭があって、七つの土橋があるんですが、土橋っていうのは本来恐ろしい場所なんですよね。歩いているだけで自分が露出されるわけで、弓・鉄砲の標的になるんですね。そして、非常に狭いんです。狭いってことは、どんな大軍で来ても 1～2 列にならざるを得ず、狙いやすいんですね。本丸の隅っこから狙える訳です。土橋っていうのは非常に恐ろしいようなところを演出しなくちゃいけない、見せなくちゃいけない、体感させなくちゃいけない訳ですが、高岡城は鬱蒼として分かりません。

高岡古城公園樹木管理行動計画

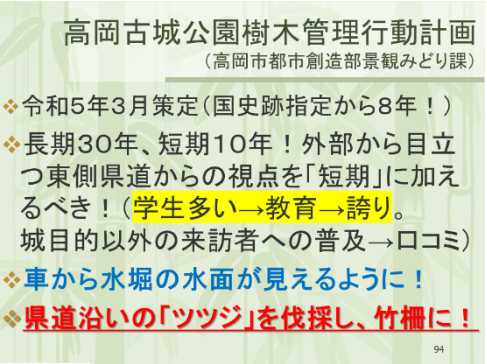


図 64

図 65

ですが、古城公園の樹木管理行動計画っていうのがついこの間、正式には今月出ました。国の指定史跡から8年掛かりました。ですが、長期で30年、短期で10年と言っております。

一刻も早くして頂きたいですね。今、お城がブームですから、毎日、どんなに天気が悪くても、博物館へ日本百名城のスタンプラリーのスタンプを押しに来る人がいらっしゃいます。しかし、いつブームが終わるか分かりません。

あそこを公園ではなくて、お城であると認識を変えていきたい。

特に、お城東側の県道は子供たち、学生たちの通学路になっておりますよね。子供たちが進学とか就職とかで県外に出た時に、高岡城は日本を代表する立派なお城なんだと、高岡の誇りなんだという認識をしっかり持って外に出てくれたら、口コミで広めてくれる訳なんですよね。

さらにこの道は、ビジネスマンが出張の機会などで高岡に働きに来るときに、非常に交通量が多くなるところです。お城の東側の方ですね、裁判所の前の通りからお城が分かりやすいように、整備を進めていただきたいですね。

高岡城跡整備の課題

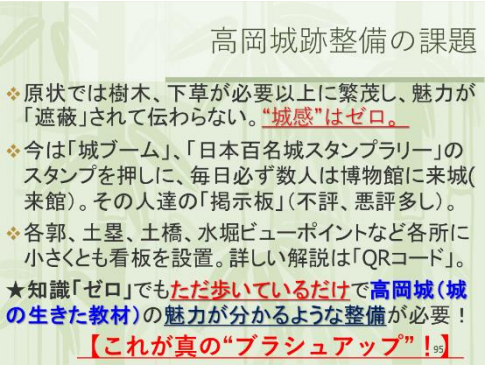


図 66

そのためには、ツツジを伐採して、竹柵に変えてはどうか、という話であります。

課題はまだまだありますが、土橋とか水堀とか土塁の法面とか、ただただ歩いているだけで高岡城は素晴らしい史跡だと分かるような整備をして頂きたい。

ブラッシュアップ、磨くっていうことを政治家の方はよく好きで言いますが、本当の意味でのブラッシュアップはこういうことだと思います。

高岡城というのは、高岡のアイデンティティですよね。

お城ブームもありますし、土橋や土塁などをしっかり整備すれば、市民がまず感動すると思います。私も恥ずかしながら就職してから、お城の事を勉強した人間なんですが、本当に知れば知るほど、学べば学ぶほど、素晴らしいお城なんですよね。それを、知識ゼロの方でも、観光客の方でも、子供にも、素晴らしいお城だと分かるような整備が必要だと思っております。

第Ⅱ幕　講演『徳川家と前田家 ― 瑞龍寺建立の謎 ― 』

講師　四津谷 道宏 氏

瑞龍寺総門は薬医門形式

図 67

それでは今日はですね、徳川家と前田家と瑞龍寺建立の謎ということでお話しさせていただきたいと思います。

皆様、瑞龍寺というのはこのように見て頂きますと、薬医門形式という総門を持っております。

薬医門というのは、矢を食う門という言い方もできるわけでございますが、お寺というよりはむしろ城か武家屋敷の門構えです。

ほとんど同じ建物が東京文京区本郷に真っ赤な色でございます。

所謂、東京大学の赤門でございます。東京大学の赤門でございますけれども、元々はですね、まあ、ただの上屋敷だった訳でございますけれども、徳川様から奥様を貰うということで真っ赤に塗り直したと言われております。ただ、その当時は財政事情が厳しく、前しか塗らなかった、さすがに「前だけ」だという笑い話だそうです。

この瑞龍寺の総門ですけれども、この門は文献によれば、どうも瑞龍寺の前身である宝円寺の門を移したという見方になっていますが、これだけ立派な門があるお寺ってどういうお寺だったのかなというのはちょっと不思議なところがございますね。

前田家が曹洞宗に帰依

図 68

この瑞龍寺というのは宗派から言いまして曹洞宗です。禅宗でございまして、臨済宗、曹洞宗、黄檗宗というのは大体大きく分けて三つの禅宗でございます。

そもそも何故、前田家があの曹洞宗に帰依したかということを考えますと、皆様、そもそも、前田のお殿様は名古屋のご出身でございまして荒子でございました。

最初仕えたのは織田信長でございました。すると、信長の方から言われたのは、北陸で一向宗を抑えてこい、ということを言われたからでございます。それで、一向宗の対抗宗派であったのが曹洞宗ということで、道元禅師の流れを非常に大事にしたと言われております。

最初に入ったのが越前です。越前にあったのが宝円寺というお寺でありました。この宝円寺というのは、さっきも申し上げた通り、瑞龍寺の前身にあたる流れという訳なんです。そこで、大透圭徐というお坊さんに坐禅を習いまして、曹洞宗との関係を強めていった。一向宗の対抗宗派として曹洞宗の力を信頼したという事情がある訳でございます。

武田信玄と不動明王、臨済宗妙心寺派恵林寺

恵林禅寺は臨済宗妙心寺派。武田信玄の尊敬を受けた美濃の快川和尚の入山で寺勢を高め、永禄7年（1564）に信玄自ら寺領を寄進し当山を菩提寺と定めました。しかし、織田信長の焼き討ちにあい、快川国師は「安禅必ずしも山水を須いず、心頭滅却すれば火も自ら涼し」と言葉を残し、僧侶等とともに火に包まれた。

図 43

そういう中で、今ちょうど大河ドラマ「どうする家康」をやっていますけれども、ちょうど今出ているのが武田信玄でございます。誰が演じているかと言うと阿部寛さんです。

皆様覚えておられるでしょうか、前に天地人という作品がありました。直江兼続の作品でした。あの時、上杉謙信を誰がやってたか、覚えていますか。阿部寛です。

これが本当、あべこべというやつです。

阿部寛が今度は武田信玄をやるという、凄いシチュエーションでございます。でも何故か、それがぴったり合っているんですよね。

その武田信玄にしましても、自らを不動明王に例えたというぐらい非常に信仰心が篤い。臨済宗妙心寺派の恵林寺が大変有名なお寺でございます。

上杉謙信と毘沙門天、臨済宗國泰寺派弘源寺

図 70

に対して、同じく曹洞宗で同じように帰依しているのは上杉謙信でございますけれども、上杉謙信は非常に毘沙門天を大事にしたということが言われている訳です。

ですが、この毘沙門天に関しては、あれ？どっかで見たことあるなという方がいらっしゃるかもしれません。

二上山の弘源禅寺の方にいらっしゃる毘沙門天でございます。なかなか趣があって、私、非常に好きであります。私は結構、マラソンやったり、自転車乗ったりするもんですから、必ずいつも行ってるところでございますね。

瑞龍寺山門の山号「高岡山」

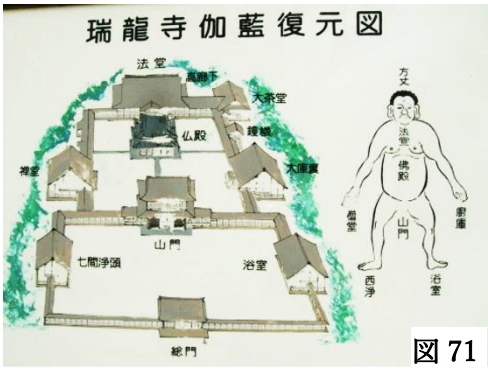


図 71

図 72

この瑞龍寺でございますけども、見事な左右対称の伽藍配置に造られておりますが、この総門をくぐったところにあるのが山門でございます。この山門よく見ると、「高岡山」という瑞龍寺の山号が入っています。

これ、誰が書いているかというと、黄檗隠元が書いています。おかしいですよね。さっき瑞龍寺は曹洞宗って言いました。この方、黄檗宗ですから宗派が違います。

曹洞宗瑞龍寺と黄檗隠元

これは、何故こうなったかと言うと、こんな事情があります。

江戸時代の時、鎖国していましたよね。

禅宗の僧侶というのは大体、道元禅師や栄西禅師のように中国へ渡って禅の勉強をしたい。ところが、鎖国しているから中国へ渡れない。だったら、中国から亡命するお坊さんがいないかなと思っていたら、隠元が入ってきた。

隠元禅師は入ってくる時に、沢山の行持規範やお経の本を持ってきました。そうすると、そのお経の本を禅宗のお坊さん達は垂涎の的としました。これは何故かと言うと、当時、お坊さん達って戦国の頃は、色々と旅して廻っていました。行雲流水という言葉がありますように、雲のごとく行き、水のごとく流れる生活をしていた。これは、自分の師匠を見つけるためだった。そういう風な修行生活

をしていた。つまり、ずっと旅していたんですね。

ところが、江戸時代始まった時に寺請制度が始まりました。今でいう檀家制度ですね。すると、お坊さんたちはどうするかというと、徳川幕府の方から、一つの集落の一つのお寺に就いて住んで、そこで寺請証文を発行し、キリシタンじゃないことを確認しなさい、という御触れを出した。つまり、お坊さんたちは今まで動いていたのが一箇所のお寺に定住、住むことが仕事になった。だから、お坊さん、住職という言い方になっていった訳でございます。

すると、お坊さんたちは何をしようとするか、修行よりもご供養しなきゃいけなくなったんです。まあ、これが世に言う葬式仏教の流れです。お坊さんたちはお経を読まなきゃいけない。じゃあ、お経の本、どうするの？お経の本、ないぞ。どうしよう。じゃあ、本山行って写してこようか。

でも、お経の本って結構同じ漢字ばっかり出てくる。写したら誤字脱字が出て、これどうしようもないぞ。どうしようかと思ったら、隠元の方で鐵眼というお坊さんがおり、その方が木版印刷しました。その時から残っている影響があって、原稿用紙ってあるじゃないですか、20 字×20 字の。あれは元々、お経を印刷するための紙だったのです。だから、真ん中で折るために蝶々みたいな印が付いていますよね。あれは、お経を印刷するためのものだったのです。

そこで、隠元がそのお経の本を印刷するということで、それを曹洞宗が黄檗宗から買いました。そうすると、前田のお殿様にしても実は黄檗宗と結ばれる意味がありまして、皆様、あのやはり、前田家というのは茶人でございます。茶人といえば、利休さんでございます。利休さんは何宗のお坊さんに師事していますか？臨済宗ですね、曹洞宗ではないです。

どっちかって言うと、曹洞宗は一向宗と同じく、相手はやはり民衆なんです。ところが、臨済宗あたりはやはり、公家とか武家向けです。そうすると、そういった人脈系統のお付き合いをしたい。だったら、臨済宗の流れを汲みたい。だったら、隠元が入ってきたんなら！当時ですね、隠元はなんて言ったかと言いますと、「臨済正宗黄檗派」と言っていた。それで、臨済宗の流れを汲むということで、山門に隠元がこのような額をあげるということになりました。

ですから、こういった時代は曹洞と黄檗のある意味、ハイブリットみたいなところが生まれていた。ただ問題なのが、逆に曹洞宗寺院に黄檗系のお坊さんが住職として入り込む形態まで行くと、今でいうＭ＆Ａみたいな構図になってしまって、これはまずいでしょってことで関係性が途切れます。言ってみれば、日産・三菱と書いて、カルロス・ゴーンと書いてあると。まぁ、状況としては同じになっちゃったということですね。ですから、臨済の流れというか、黄檗の流れは、その後無くなっていくという事情があったという訳でございます。

瑞龍寺の鉛の屋根

図 73

瑞龍寺というのは皆さんご存知の通り、鉛の屋根を使っています。現在、この鉛の屋根というのは 47ｔ乗っている訳でございますけれども、厚さ 3 ㎜位で非常に雪に強いと言われています。

下ろして溶かすと、47ｔと 250 万発という大変な戦力になるというのはよく言われるところです。

ただですね、鉛の屋根を使った理由については他にも理由があって、どうも金沢城あたりのあれを見ていると何といいますかね、今の若い人が使う映（ば）え効果ってやつですよ。映えるんですね。

大体、北陸のお寺というのは瓦を使いますと、釉薬使って真っ黒になる。どうしても、屋根、黒いと沈んで見えます。ところが、こういった鉛の屋根を使うと白く光り輝きますので、非常にこの、明るく見える。

江戸城の鉛の屋根

図 74

先ほどもちょっと、仁ヶ竹さんの話に出ていた江戸城でございますが、私、暇にかまけて自分で描いてみました。大体、こんな感じだったようでございます。

一番奥に天守閣がありますが、その手前に大奥があります。一番奥にあるから大奥ですね。この天守閣、最初の頃は一連だったんですが、二代、三代でやり替えています。それで二連になったということが言われています。どうも、その前後に鉛でやっていたんじゃないか、と言われています。あの、遠くから見ても夏なのに屋根が白く見えるというような旅行記がございますから、恐らく江戸城も鉛の屋根を当てていたということが想定されます。

加賀藩の石高、富山県側の石高

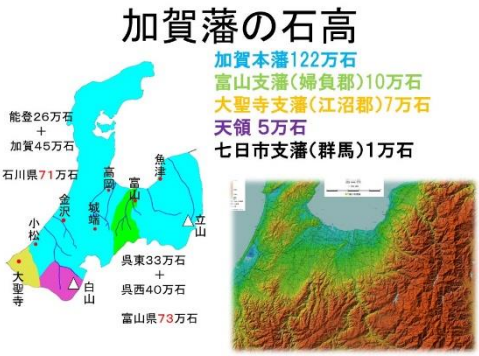


図 75

実は、鉛の屋根を使う理由は、他にもちょっと理由が考えられますが、皆様、加賀藩ですが、石高が非常に大きい訳でございます。石川県側で 71 万石、富山県側で 73 万石くらいですから、さっき中心が高岡だという話をされておりましたけれども、石高で言うと富山県の方が大きいです。特に、砺波から射水にかけてこの辺りは非常に石高大きいです。

ですから、加賀藩にとってここは絶対押さえておかなきゃいけない重要な場所だったということがある訳でございますね。全体で 122 万石あって、富山藩は 10 万石で、大聖寺藩が 7 万石、天領が 5 万石、七日市藩（群馬）が 1 万石あった訳でございます。

加賀藩の鉱山

図 76

この富山藩というのは10万石がある訳ですが、こんな形をしています。でもこれよく見ると、この上の岩瀬の方は加賀藩になります。これは何故かと言うと、こっちの方に絶対加賀藩として押さえておかなきゃいけない重要なものがあったからです。

それが何かと言いますと、鉱山でございます。いわゆる金山、一番大きいのが松倉、下田、虎谷、亀谷というような大きな金山がありました。その金山ですけれども、特に松倉は、どうも佐渡の相川金山に匹敵する金が出ていたということが言われております。

松倉金山

図 77

図 78

私、自転車で行ってまいりました、その松倉金山に行ってまいりました。大体、この辺に松倉城です。この角川ダムというのがありまして、ここからずっと奥入っていきました。どうなっているかと言うと、これが入口ですね。ただ皆さん、行かないでください。クマ出ます。危ないです。

ずっと行きましたら、ここに穴があります。恐らく、これが入口ではなくて、空気が通る穴じゃないかと思いますが。この下のほうに多分、金があると思いますが・・・。

図 79

面白いのは、この辺にヘビノネコザサっていうシダみたいなのが沢山あるんですよ。皆さん、これってこれがあると金があるってことです。昔の人はこれを見た時に、あっ、ここ金取れるぞって、すぐ分かった。こういうので、やっぱり探していたんでしょうね。その時に、ちゃんと行ったぞ、という写真です。

長棟鉛山

図 80

図 81

図 82

他に、鉛の話をしましたが、実は鉛って富山県で採れているんです。大きな鉛山があったんですが、それが長棟っていうところなんですよ。これの行き方は二通りあって、谷のここから上がっていくルートと、県境を越えて入ってくるルートがあります。

ここに、長棟鉛山ってあります。これが、県境です。ここに、池野山という山があります。大体ここがその鉛溜まりです。私、行ってみましたけれども、この上がっていった先にあの長棟鉛山があります。

この辺は木が生えてないのですぐ分かりますが、大体こんな形になっています。この山ですけれども、1400m弱です。ここの一応てっぺんまで行きましたけども、このてっぺんから見るとちょうど立山の薬師岳が見えるような場所です。

ちょっと興味深いのは、ここで非常にたくさんの鉛が取れた。前田のお殿様が瑞龍寺なんかに上げています。この出た鉛を実は、石見銀山まで出しているのが、書類として残っています。

加賀藩と三井鉱山とスーパーカミオカンデ

図 83

この山、ちょっと曰くがあります。この山の地下1000mにある有名な施設があります。それが何かと言いますと、スーパーカミオカンデです。

関連付けるとちょっと嫌らしいですが、まあこの池野山の地下1000mですがずっとですね、三井が鉱山やっとった訳ですよ。そうするとその鉱山から、前田様も鉛をやっていたんですけれども、三井さんは下のほうで亜鉛を採っていたんです。

ところが、亜鉛そのものに毒はないんですけれども、銅元素に非常に似た性質を持っていたのが水銀一種のカドミウム、それが富山県に入ったために起こったのがそういうことですね。そういうことになっちゃったもんですから、三井さんも亜鉛に関しては外国からも安く入ってくるし、これは採算が取れないね、もうこれは公害になるし駄目だ、ということでその鉱脈を切った。

そこに、小柴教授が目を付けたといった内容でございますけれども、あの大きな穴をもうちょっと拡充すれば、これは素粒子の研究ができるのではないか、ということで造ったのがスーパーカミオカンデという流れになるということであります。

実は、前田のお殿様や、三井さんの色んな流れがあると言いますと、加賀藩っていうのは金属に関しては相当豊富な財力を持っていたという言い方ができてくるんじゃないかと思います。

加賀藩と余剰米と北前船

図 84

また、加賀藩が非常に財力として持っていたのが北前船と考えられる訳でございますけれども、北前船というのは、最初は前田利常が始めます。

何をしたかというと、前田のお殿様は石高 120 万石ありましたよね。でも、120 万石あったら 120 万人を養えるお米がとれる。でも、そこまで人口がいた訳ではないので、お殿様の手元に 20 万石位の蔵米が残ります。でも、お米ってどうでしょう。そのままにしておくと、価値が下がってしまい、古米になります。

今の農協さんもそれで困っています。だから、お米、ちゃんと食べてください。パンを食べないでくださいってことになる訳でございますが、それでお米をじゃあ、どうするのかっていったら、それは結局、売ればいい訳でございます。じゃあ、どうやって売るかって考えますと、当時考えたのは、最初は兎に角、敦賀まで持っていきましょう。敦賀から琵琶湖に持っていきましょう。琵琶湖から丸小舟使って、京都・大津に持っていきましょう。京都から大阪に抜けて、そのお米を販売するということをやっていた訳であります。

でもこれは、距離は近いですが、積み替え、積み替え、積み替えで、非常に効率が悪いと、米がこぼれてしまいますので、あまり良くないです。そこで、三代利常はある方とコンタクトを取りました。それが、兵庫の海運大手、北風家でございます。今でいう鴻池さんの親戚です。そうすると何をしたかというと、ずっと関門海峡を通す形で大阪にお米を運んだところ、これが意外と上手くいった。時間も短い、お金もかからない。これいいなってことになります。

でも、これって誰でも思いつくことだと思いますか？　でも、できなかったんです。なぜだと思います？　この辺にあの方々がいらっしゃった。お分かりですね。ルフィではございません。村上水軍でございます。ただで行ける保証がなかった。命の保証がなかった。ところがどうも、毛利さんにくっついた後、水軍が弱体化しまして、意外とすんなり通れることが証明されたんですね。

それを、前田のお殿様が証明したわけでございまして、するとそれを機に喜んだのが近江商人でございます。「前田のお殿様、如何でございましょうか？　ここはひとつ Win- Win の関係性ということで、大阪にお米を下ろした後、船は空荷となっておりますな？　ここはひとつ、私どもに、商売をさせていただきたく思っております。」で、そのまま北前船の流れになったのであります。

そのうちに、近江商人から北陸商人にとって代わられ、それから蝦夷からニシンや昆布などが買い付けられ、それがずっと大阪まで持ち込まれる。そして、大阪においてはその昆布を使うことにより、大阪のうどんそばの出し汁は大体薄くなった、という話もあるそうでございます。

ところで、江戸はどうだと申しますと、関東ローム層の影響があって水が固い、煮出す時間が長い、江戸っ子は気が短い。だったら、昆布出し汁じゃなくて鰹出し汁だということになって、そこから野

田のキッコーマンを突っ込んで出し汁が濃くなっていったと。関ヶ原を境目にして、どん兵衛の味が違うという事情が起こってきた訳であります。

お酒なども、まだまだ販路に美味しいものがないぞということで、わざわざ上方より取り寄せた。上方から買うので、下ります。美味しいものは下る。美味しくないものは「下らない」ということなのであります。

そうやっているうちに、富山の薬問屋さんが色々と動き始めまして、結局、薩摩まで行ったそうでございます。そこで、薩摩組を形成した。薩摩組に入ったのは良かったのですが、薩摩の方で、どうも富山の薬売りがなんかまあ、念仏に関してやっているんじゃないのか。隠れ念仏でございますからね、この辺は。そこで、布教やっていたんじゃないかって話も出たためにですね、薩摩がそれを警戒しまして、富山の薬問屋が入るのは許さんぞ、みたいなことを言い出した。

そこでどうしたかというと、念仏の代わりにあるものを持って来るのであれば取引を許してやってもいいぞって話になってきて、何をしたかというと、薩摩さんが言ったのは「昆布もってこい」でありました。これ、何故かっていうと、薩摩は琉球経由であの国と取引をしていたからです。結局、中国ですね。中国は砂漠が広いですから、どうしても甲状腺を痛めますので、昆布が必要。昆布が非常に高価でした。だから、そのことを知っている薩摩は、そのことを富山に要求して、それで持ってこさせました。

富山の薬問屋さんはその昆布を譲るんですけども、今度は中国の方からあるものがひも付きで入ってきたそうでございます。おわかりですね。漢方薬だったそうでございます。富山の薬売りさんも、薬は日本国内だけではまかないきれない訳でございまして、外国から入ってそういった薬を入れざるを得ないところがあったと思うんですよね。そういう中で、富山の薬問屋さんと薩摩のWin-Winな関係性が生まれた。

このことによって何と、薩摩は500万両の借金を抱えていたが、あっという間にプラスに転じ、そして利益に関しては、幕府に対する倒幕運動の資金に代わっていったということが言われています。これはあまり大きな声では申せませんが、それがある意味、北陸銀行であったり、そういう資金の方向に流れていったという、あまり言っちゃいけませんが、いろんな事情があったりするわけでございます。

加賀藩と五箇山と煙硝作り

図 85

そういう中で、前田のお殿様の財力は非常に大きかった。あと言われているのが、五箇山の合掌集落でございます。ここで何を作っていたか、みなさんご存じの通り、塩硝（硝酸カリウム）を作っていた訳でございます。

この間、一向宗の争いが「どうする家康」に出ていましたが、一向宗がなんで強かったか。それは、鉄砲であったり、塩硝を沢山持っていたんですよ。実際、その五箇山合掌集落があれしてたのは一向宗の流れでありまして、そういう中でやっぱり、

前田のお殿様はそれを抑えて千倍にしていくというのは、なかなか大したもんだなというところはある訳でございますね。

で、これあの、渋沢栄一の大河の中で出ていました。これが塩硝でございます。渋沢栄一が塩硝作りますよっていうことでそれであの慶喜に「こういうことできます」ってね、見せたシーンがあるんですけれども。

図 86

越中五箇山の煙硝は国内では最高品質として扱われ、あの江戸花火大会でも密かに使われていた。 図 87

私、ちょうどこの頃、五箇山の合掌造りに行きましてね、聞きました。「ねえ、昨日、出てましたよね。」「ＮＨＫさん、実は借りに来ました。」って話で、「ちょっとうち貸せないんで、あそこにあるよっていうことを教えたら、それが出たみたいですよ。」

これ、ここだけの話なんですけど。こういった塩硝作りなども加賀藩は非常に得意だった。

その塩硝の道という物がありまして、これも私、行きました。ただですね、ここはね、はっきり言って凄いです。道じゃありません。獣道にもなってません。私は帰りに地獄を見ました。

というのは、この辺あたりで崖崩れになっておりまして、ここからここまで行って、もうちょっとで着けたところで崖崩れになっておりまして、もう真夜中ずっと戻りました。もう死ぬ思いをしましたけどね、まあ何とか、ここに生きています。まぁ、塩硝の道な訳でございますけれども、これも加賀藩の凄いとこでございます。

そういった塩硝が何に使われたかというと、言ってみると、江戸の花火大会などにも使われていたということでございます。

まあ、五箇山というのは山深いところでありますけれども、加賀藩にとってとても重要な場所だったということであります。

瑞龍寺と立山連峰

図 88

瑞龍寺でございますけれども、皆さん、ちょうどですね、これ、これから太陽が上がるというところでございますけれども、ここに見えているのは何かといいますと、立山連峰でございます。

瑞龍寺は東向きで造られています。

その立山にあるものは、皆様ご存知の通り、あちらの世界でございます。

図 89

大体、富山県の方は、亡くなると立山の方に行くと思っていた訳でございます。地獄であったりですね、弥陀ヶ原であったりですね、針山地獄を現わす剣岳、こういったところに昔の人は行くのだろうなって思って、立山を拝んでいたというところもある訳でございます。

あの前田利家の大河の中でも、利家の最期のシーンでこんなことがありました。

利家が病の床に就こうとすると、妻のまつが手縫いの経帷子を見せて、「あなたはこれまで戦場で多くの人を殺してこられた、その報いが恐ろしいので、この経帷子お召ください」と言うと、利家は「わしはこれまでの合戦で多くの人を殺したが、理由もなく人を殺したことはただの一度もない。それでも地獄に落ちるというなら、わしより先に逝った者たちを集め、閻魔や鬼どもを相手にもう一戦してくれるわ。その帷子はお前が着て参れ」ということを言ったそうでございます。人間ここまで言えれば、大したもんですね。

瑞龍寺の不思議、前田利長公の位牌

図 90

図 91

徳川家の菩提寺　岡崎大樹寺
位牌堂には等身大の歴代徳川将軍の位牌が祀られている。

そういう中で瑞龍寺というお寺ですけれども、皆さん、ちょっと見た時に不思議なところがあります。正面一番奥の法堂でございますが、前田利長公の位牌が安置されているんです。全国広しといえども、位牌が真ん中になっているお寺って無いんですね。大体、正面に観音様か阿弥陀様があって、位牌は大体、脇です。

例えば、あの今やってる大河ドラマ「どうする家康」っていうのがありますが、その中で、岡崎大樹寺に、これずっと歴代の松平家の位牌があります。背の高さで作られていて、徳川家康が大体 159cm ということが言われます。大体は、位牌は別に作ります。

図 92

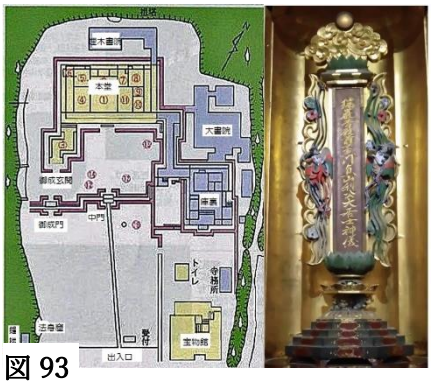


図 93

瑞巌寺殿前黄門貞山利公大居士神儀

あとですね、瑞龍寺とよく似ている瑞巌寺ですけれども、一番奥に本堂がありますが、本堂に祀られてはいますが、この伊達政宗の位牌でございますが、真ん中じゃ当然ございません。今観音さんになっています。ここに観音様が祀られています。この観音様は後から祀られたそうで、どうも最初の頃はどうなっていたかというと、この伊達政宗のお像そのものが真ん中にあったという話があるそうでございます。

そういう意味で言うと、前田も伊達もそうですが、ちょっと意味合いが違ってたのかなという気がします。

図 94

図 95

この伊達政宗の図を見た時にちょっと面白いことが分かるんですけれども、これが上段の間の横にある上上段です。皆様、上上段ってだれが入りますか？　これは、帝様が入ります。

つまり、伊達政宗は天下をとる気満々だったということであります。伊達政宗が 30 年ぐらい早く生まれていたら、本当に天下を取りに行ったんじゃないかなというところだったんですね。

前田家のルーツ、先祖は菅原道真

図 96

ところがですね、前田のお殿様って面白い所があって、天下の一文字も出していないんですよ。これ、こんな話がありまして、前田家って、この方を自ら先祖として考えていた訳でございます。

「東風吹かば　匂いおこせよ梅の花　主無しとて春を忘るな」

菅原道真を自らの先祖と崇めていた訳でございます。

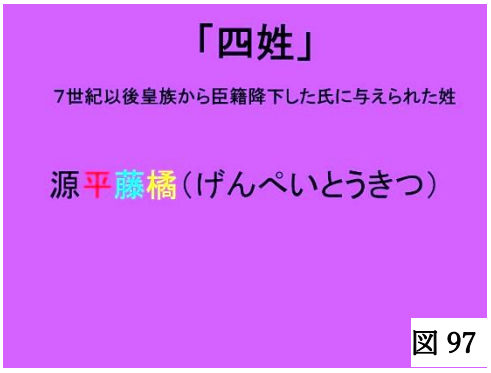


図 97

そこで皆さん、ここ、試験に出ますので覚えておいていただきたいんですが、日本においては昔、四姓というものがありました。インドでは例えれば、バラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラっていうカースト制度の話が出てくるんですが、実は、日本における四姓はちょっと違うんです。それが何かというと、源平藤橘、源氏、平家、藤原、橘、この四つの家が四姓でございます。この方々が言ってみれば、天皇との関係の中で一応持っているということで、天下人になり得るということになる訳でございます。それで、昨年の大河の話が出てきましたけれども、平家がとったら源氏がとって、源氏と平氏に

よる所謂、源平交代思想になっていた訳でございます。その中で、平家の流れで言うと太政大臣、源氏の流れで言うと征夷大将軍という形になる訳でございます。

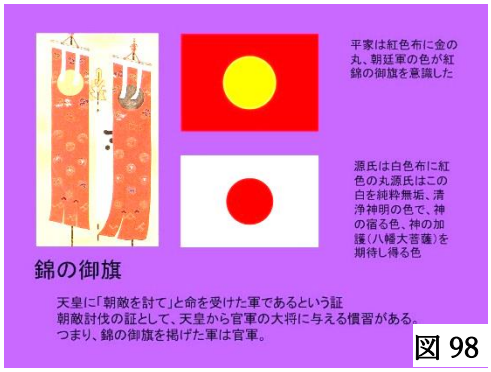


図 98

平家の方で使っていたのは、最初はこちらでありまして、金で、あの周りが赤で、こんな感じでございます。これが、錦の御旗のモチーフにしたというところがあります。ところが、源氏さんもこれ使いたいんですが、使えないんですよ。それで何したかと言うと、白に赤にしたということがあります。源氏さんはこっちでございます。これは何になったか、もうお分かりでございますね。日本の国旗ということになるわけです。源氏さんがいなければ、日本の国旗はこっちになってるんじゃないかという話もあったりしたりする訳ですね。

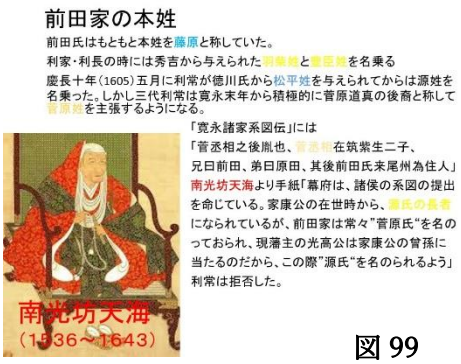


図 99

そういう中で実は、前田家はあの寛永諸家系図という書物の中で、自らの姓を菅原って付けました。でも、そのことにすごく文句を言ったのがこの方でございます。南光坊天海というお坊さんです。何を言ったかというと、前田家は元々藤原の流れを言っていた訳でございますけれども、それを菅原にすると。これはどういうことかと。

もともとは源氏のあの前田家というのは、あの徳川方から松平姓を許されているではないか。ならば、なぜ今さら、菅原を言うんだっていうことで、天海から怒られたという話があります。でも、前田さんは菅原性を押し通したそうです。

前田家と瑞龍寺の造営年代

図 100

この南光坊天海さんなんですけれども、瑞龍寺の話に戻してくると皆様、これをちょっとこれ見ていただきたいんですが、瑞龍寺って1645年から1663年まで造ってます。するとですね、何が起こるかというと利長公の菩提寺ですよね。利長様が亡くなったのは1614年でございます。ところが、45年ってことはどれぐらい違ってくるかというと、こういうことであります。31 年後から造り始めて、ほぼ 50 回忌まで造った。言い方を変えると、33回忌までの1年前から造り始めて、50回忌まで造っていたということです。あり得ます？　あり得ませんよ、これ。

利長の菩提寺であるならば、亡くなってすぐにあの大きな伽藍を造る、なら分かるんです。ところが、弔い上げの後から何でこうなったか？　そうすると、あることが見えてくるんです。

前田、徳川、織田の血を引く前田家三代光高

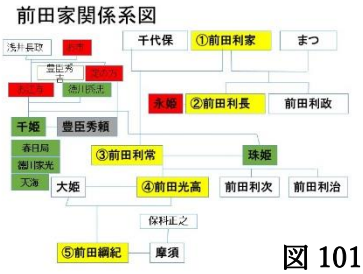


図 101

前田家三代光高という方です。この方は、1645 年に江戸屋敷において、徳川の重鎮を接待している最中、お茶飲んで倒れて亡くなってしまいました。それ、1645 年。この方が亡くなって、喪が開けた位から瑞龍寺を造り始めたんです。もしかすると、これがすごく重要な意味を持っているかもしれません。

利常にしてみれば、光高は自分の息子であります。興味深いのは、光高は誰と誰の間に生まれているかということを考えますと、利常は珠姫を貰っています。珠姫は誰の子かと言いますと、二代将軍秀忠と江との間に生まれます。

そういう意味でいうと、利常と結婚すると織田家の血と徳川家の血も出るんです。すると、光高は、前田、徳川、織田の血を持っているんです。

家光様に最初お世継ぎがいなかったので、江様が何を言ったかというと、だったら前田家に光高がいるじゃない、あの子を養子縁組してもいいのよ。徳川将軍にしてもいいのよ。みたいなことまで言っていたそうです。

ところが、1645 年、江戸屋敷において亡くなった。

恐らくこれは、伊達光宗もそうだったのですけれども、徳川自身が命じたかどうか知りませんが、もしかするとやっぱり、消されてしまったというところがあるかもしれません。

そういう中で、利長の死ということと、利常が光高の死を重ね合わせたのではないかということも、考えられるわけでございます。

前田利長の晩年の頃

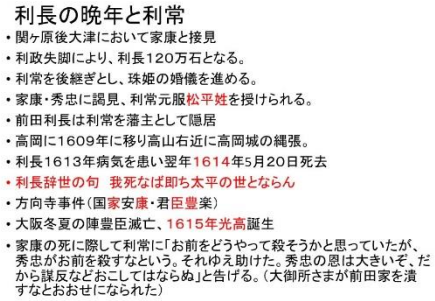


図 102

そこで、利長が晩年の頃、どういうことを言っていたか。

1614 年 5 月 20 日にお亡くなりになるのですが、辞世の句がこうです。「我死なば 即ち太平の世とならん」ということを言った訳であります。私が死ぬことで世の中は平和になっていく、というのは利長様が亡くなった 1614 年というのは、その後直ぐに、方広寺事件が起こる訳です。

つまり、こういうことになるんですね。大阪冬の陣になってきます。

ということは、利長が亡くなったから冬の陣になったという言い方もできる訳でございます。実際、利長が亡くなったことを聞いた大御所は、「かわいそうなことをしたのう」と言いながら、直ぐに、方広寺というお寺の中に出てくる小さな鐘の文言を「国家安康　君臣豊楽」と、家と康に安が入ってる。徳川を、豊臣が呪っているのであろうということで、冬の陣がスタートした訳でございます。

三代目利常としては、一万二千の軍勢を率いて大阪に向かう、しかし、まだまだ 22 歳の若者であり、

初陣。しかも、相手が真田幸村。井伊と並んで大敗を喫することになります。

何が言いたいのかというと、このお殿様の犠牲のもと、利長の犠牲のもと、三代目利常の活躍が生まれたのです。どこかの家具屋さんのように親子で喧嘩している場合ではないのです。

その冬の陣、夏の陣が終わった後に起こったのが、光高の誕生だと。利長の生まれ変わりは光高だということも言われていたそうでございます。

京都を模した高岡のまちづくり

図 103

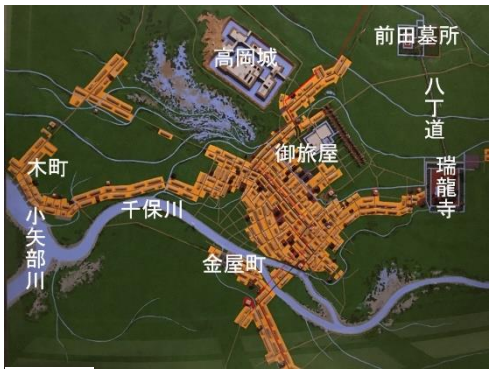


図 104

そんな流れで皆様、瑞龍寺というお寺をこうやって見る時に、この高岡の関わりの中でこうやってみて参りますと、高岡のまちづくりのやり方っていうのは、あるものちょっと似ているんですね。

それが何かと言いますと、京都です。京都を模して高岡の町を造っているのではないかなというところが、何となく見えます。

図 105

この位置関係をちょっとあれしますとね、高岡と京都ですね。ちょっと比べてみたら、富山湾がありますね、二上山がありますよね。で、高岡、琵琶湖と比叡山と京都、この形と結構似ているんです。つまり、高岡を京都みたいな町に、利長はしたかったんじゃないかなという気がするんですね。

京都を模した江戸のまちづくり

図 106

例えば、京都の町の造り方を江戸に反映しようとしたのが、南光坊天海なんですが、天海が造ったもので有名なのが、東叡山寛永寺です。東の比叡山で、東叡山ということになる訳でございます。上野を山にして、琵琶湖を不忍池にして、竹生島を弁天島にして、寛永寺というお寺を造ったと。その江戸城を守るために、鎮守として選んだのが平将門だったりする訳でございます。

瑞龍寺と前田利長公墓所

図 107

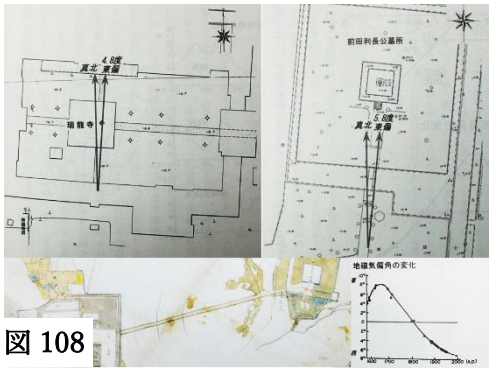


図 108

そうするとですよ、前田のお殿様にとっては、同じ理由がちょっとあったんじゃないかなっていう気がするんです。

この瑞龍寺っていうお寺とこの前田墓所なんですけども、関係性があって、方向におもしろいずれがあるんですよ。前田墓所でいうと、真北の方角から東の方に 5.8°ずれます。瑞龍寺は真北の方から 4.8°位ずれます。これがなんのずれかと考えますと、どうも地磁気のずれ、これがどうも反映されたものではないかと思います。

すると、前田のお殿様も、実は徳川さんも、こういったものを造る時にちゃんと磁石を使っていた、ということが想定されてくる訳でございます。

岡崎大樹寺と久能山東照宮

図 109

これは久能山東照宮ですけども、今年の大河の一番最後の頃に、家康がこう言います。「亡くなったならば、岡崎の大樹寺に位牌、久能山に葬り、富士(不死)の山を通って日光に勧請し、関八州の鎮守になろう」という言葉を述べるのであります。これは、南光坊天海が考えたやり方でございます。

それを忠実に行ったのは、この久能山東照宮でありまして、鳳来山の岡崎の方からずっと線が伸びてくると、その久能山から富士山の方に当たるという、非常にすごいラインがあるのです。

日光東照宮と三代将軍家光、そして世良田

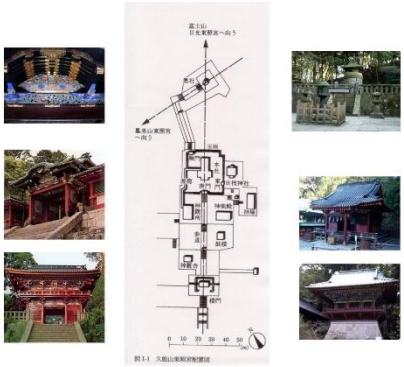


図 110

日光東照宮は、これはずっと北を背にしています。ずっと北極星を中心に回っている写真を、皆さん、見たことあるかと思いますけれども。そういう中で、これが三代将軍家光の廟なんですけども、輪王寺というお寺の中にあります。その後ろ部分をちょっと見た時、これ見たことありませんかね、これ瑞龍寺の仏殿と瓜二つ。これ見た時に、やっぱり前田さん、徳川を相当意識してたんじゃないかっていうのがあります。木に色彩は付いているんですけども、やはり同じく禅宗用の建物ということになります。

図 111

図 112

で、日光東照宮って面白いんですが、最初に作った秀忠の廟は、世良田にあるんですね。

この間言ったことを覚えておいでかは分かりませんが、前々回の家康の中で、一生懸命掛けて家系図を繋げて、松平がどうやって源氏を名乗るかって一生懸命やってたんです。その時、世良田の新田義貞の家系図に徳(得)川って書いてあって、これを見つけた時、ああこれで源氏を名乗れるぞ！

つまりさっき言ったように、征夷大将軍を名乗るためには源氏が必要です。そこで松平さんは、世良田に非常に注目して、いっぺん造った東照宮を家光さんはここの世良田に移しちゃったのです。あんまりそこまで言うと、立派なもんじゃなかったとも言える訳です。

徳川家の風水と前田家の風水

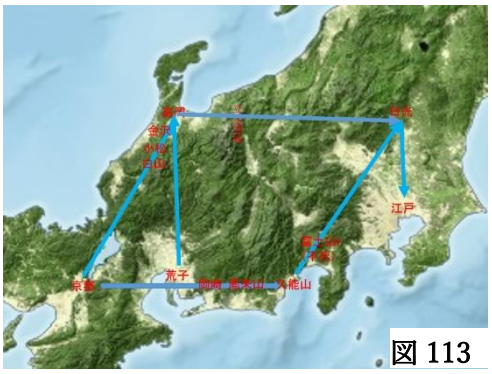
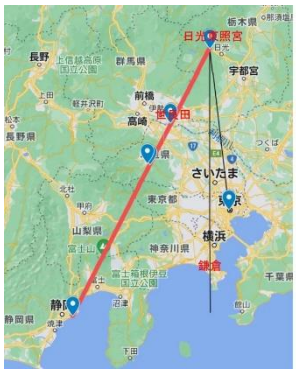


図 113



東照宮は北辰を背に南向きに造られている。江戸城よりも鎌倉を向いていると言ってもよい。造営された江戸時代初期は偏角が東に約6.5～7度なのでほぼズレは合致する

図 114

それで、この関係図のおもしろいところですけど、皆様方。

京都ありますよね、岡崎鳳来寺山、そして久能山、これが言ってみれば一直線に結ばれる。これは有名な話ですが。

その次です。久能山と富士山の上を通って、日光へ勧請する、これがこの線です。

そこから何をしたかというと、その真南に江戸を作っている。これで風水を使いながら、ちゃんと、徳川家康を神として祀る手段という物を考えてある。

そこで、前田のお殿様も同じことを考えたのではないでしょうか。ご覧ください。

京都から白山があって、小松があって、金沢があって、高岡があって、直線でこうやって繋げます。ちょっと金沢、ズレていますが。

これ、京都ってちょっと意味があります。皆様、京都って何があるかというと、北の天満宮があります。菅原道真でございます。小松にもやはり天満宮があります、まあ、利常が造りました。

そういう中で、高岡にもその線を結んでいく。もう一つは、荒子から高岡。この線なんですが、荒子から高岡のこの線って、実は、前田利長墓所の線と見事に合致するんです。

瑞龍寺、さっき、東向いているっていう話をしましたが、高岡から東に何があるんでしょうか。まず、立山があります。その立山を超えると、日光があります。なかなかおもしろいと思いません？

するとさっき言いましたよね、徳川さん「久能山東照宮に葬り、富士山の上を通って日光へ勧請し、関八州の鎮守とせよ」といった訳ですけども。

すると、前田のお殿様は、将に、高岡の方から立山の上を通って日光に向けていると。すると、考え方として二つあると思います。

これは、徳川家康に対する、前田利長のある意味「忠誠心」だと、という言い方もできます。しかし、これを向けるということは逆の意味もあります。カウンターとも言えます。つまり、「対抗心」という訳です。もし、前田家を徳川が潰すようなことを考えるのであれば、菅原道真のような怨霊になってでもこの地を守り抜きますぞ、というような意味合いを込めたかったのかもしれません。

徳川家康がこのように立派な東照宮に祀られていく中で、前田のお殿様にとっても、やはりそこに同じような気持ちがあったのかもしれません。

前田利常の天海大僧正封じ策

図 115

ここ丁度、お彼岸の日でございますが、春分の日の出を、山門から見ました。ちょうどこの大体、数歩ずれているんですが、今、太陽がここから上がっています、これが真東です。当時は、ここが恐らく真東だったと。ですから、ちょうど東を向けて作ると東照宮の方に向くなというのが、前田のお殿様利常様もなんとなく感じておられたのではないでしょうか。そういう中で、ある程度測量しながら確信をもって、利長墓所を荒子に向け、そして瑞龍寺を立山を介して日光に向けることによって、徳川の天海大僧正のいろんな動きを封じていたのではないかなと思ったりします。

加賀梅鉢、星梅鉢と陰陽道、そして利休

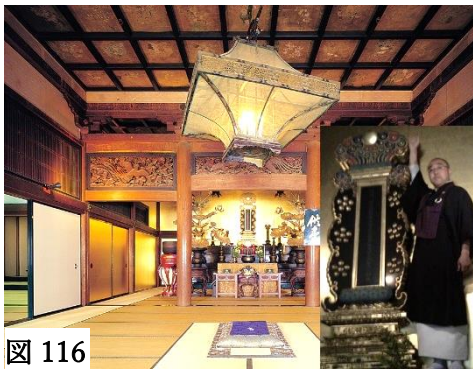


図 116

図 117

その中の、一番奥の位牌ですけども、大体これぐらいであります。私、この時ちょっと太っておりました。今は10 kg以上痩せました。

位牌を見ていただきますと梅鉢紋ですが、ちょっと梅鉢が違うんです。これが、加賀梅鉢ですね。これは、星梅鉢なんですよ。これはある意味、六曜紋ともいうんですけども、やはり陰陽道とも関係してくるものなんです。

そういう中でやっぱり、陰陽道と言いますかね、そういうものと関連付けたかったということです。

図 118

あの利休さんがこんなこと言っています、

「利休めは とかく果報乃ものぞかし 菅丞相になるとおもへば」

つまり、切腹すれば菅丞相のようになれるよ、果報者だよ、ということをおっしゃっています。菅丞相とは、誰のことでありましょうか、菅直人さんのことでしょうか、菅義偉さんのことでありましょうか。これは、菅原道真のことでございます。

私は、亡くなることによって、菅原道真のような茶匠にもなれるぞ。つまり、神様にもなれるぞ、ということをちょっと仄めかしてるっていうか、そういう言い方の中で、利休さんが仰っているというのは面白いことであります。

すると、前田家がこの梅鉢文を使いながら、菅原の名前を名乗る理由はそこにあります。やはり、利長というお殿様を神格化させて高岡を守る。金沢はおそらく利家公でありますし、高岡は利長が守っている。

そういう風な意味合いを、呪術的な意味合いを含めて、こういったものを付けたのではないかと思います。

前田氏は、菅原氏の後裔を称しているが、おそらく、藤原利仁流斎藤氏の後裔であろうと見られている。
大和国は菅原氏発祥の地であり、天満宮を奉祀する神社も多く天神信仰も盛んで、いまでも、梅（梅鉢）紋を使用されている家は、菅原氏の縁りか、先祖が天神を信仰していたことを伝えているものと考えられる。
菅公愛好の梅を組み合わせた梅鉢というのは、星を崇拝した海人族の名残ではないかともいわれている。すなわち、呪符的シンボルとしての六曜を神格化したものといわれている。

図 119

瑞龍寺法堂の鳳凰

中国の詩経の一節「鳳凰鳴けり彼の高き岡に」

図 120

真ん中の丸柱と横に走る貫が欅となり鳥居のようである。

極めつけは、この瑞龍寺の法堂なんですけども、下の方の拝殿から見た時に、あるものが見えるんです。それが何かと申しますと、中国の詩経の一説「鳳凰鳴けり彼の高き岡に」にあるんですが、鳳凰という鳥が鳴いてますよね。鳥が居りますよね。これって鳥居じゃないのかという話がございます。つまり、利長公を祀ってあげたい。でもこれ、公表できると思います？ 文献に載せられると思います？　絶対ＮＧですよ。

上杉謙信も、武田信玄も、伊達政宗も、神社は明治以降に造っています。

利家も実は神社があったのですが、江戸時代、卯辰山の卯辰八幡宮を建立して、その中にこっそり祀っていました。本当は、二上山にあった物部八幡宮と榊葉神明宮を移して、こっそりそこに祀った訳でありますが、これは公然の秘密だったそうです。

ですから、金沢は利家が守り、高岡は利長様が守られるのだ、そういう意味合いを込めて造ったのがこの瑞龍寺というお寺に、私は、なってくるような気がします。

ただこの辺の話につきましては、もう、一僧侶が語れる限界をあきらかに逸脱しておりますので、この話は越後のちりめん問屋さんにはお話にならないよう、ご配慮お願いいたします。

どうもご清聴ありがとうございました。

第Ⅲ幕　鼎談『未完都市「高岡」の原点と温故知新』

仁ヶ竹 亮介 氏　&　四津谷 道宏 氏　&　相本 芳彦 氏

前田利長公、高岡城築城の思い入れ

相本　：　皆様、こんにちは、アナウンサーの相本でございます。

最近は高岡ケーブルテレビで、あちらの仁ヶ竹さんとご一緒にもうこれで8年間、シーズン23 まで高岡ふしぎ帖という番組を作って、いろんな形で高岡の歴史を深掘りしたり遊んだり斜め読みしたりしております。そのお陰で、今日はこちらの方に呼ばれたんじゃないかと思っております。

皆さんご存じの通り、仁ヶ竹さんも四津谷さんもほっとけばいくらでも喋るんですよ。

なので、私はタイムキーパーにやってきたぞという風に思っていただいて、最後の締めに入りたいと思います。

まず、重要な今日の一番タイトル、未完の都市「高岡」。高岡は完成していないという風に今回題されております。まず、仁ヶ竹さん、高岡が未完というのは合っているんでしょうか？

仁ヶ竹：　そうですね。築城後、利長は入城の翌年に病に倒れるんですよね。その後、ほぼ寝たきりであります。まあ一時、一瞬回復はするんですが、寝たきりになってしまうのです。

先ほど言いましたが、色んな建築物とかに指示を出していますけど、まだ全面発掘はしておりませんので、はっきり確かめられてはおりませんけども、利長時代の若干ある史料からは、利長ゆかりの建造物はあまり記録に無いんですよね。利長が 1605 年に富山でやった、当時の常識である総構えも高岡にはない。

もしかしたら建築、城下町造成がストップした可能性ありますね。

相本　：　それには何か理由があるんでしょうか?

仁ヶ竹：　そこは史料にないので断言できませんが、病に倒れたことと、後はもう、幕府のプレッシャーが年々強まっていって、ちょっと心折れちゃったのかなと思わなくもないですね。

相本　：　それこそ、先ほど四津谷さんの話に出てきた、「私が死んだら世の中が太平になる」。つまり、前田家の現当主が亡くなると、やりたい放題の人が出てくるけども、それでまとまるんだろう、というようなことを晩年は考えていたんですかね。

仁ヶ竹：　そうですかね。実は、利長って本当に、最々晩年に高岡城を棄てているんです。あまり言われてなくて、あまり言ったら利長公・・・、まあ事実なんで。幕府のプレッシャーが強くて、強すぎたからどうとかは分かりませんが、もう、高岡城を壊しますと申請します(1614 年 2 月 18 日付)。

相本　：　まだ、一国一城令の時代ではないんですね。

仁ヶ竹：　そして、隠居領の新川郡、先ほども言われました大事な大事な鉱山がある新川郡を幕府に返上します。

自分自身は、京都所司代の板倉さんの隣に小さな屋敷でいいので住まわせてくださいって、幕府に申請出すんですよね。で、それが認可されちゃうんですよね。

それが、しばらくした5月に利長が死んでしまったので、最後までそれが実行されずに済みましたけど、それがもう、利常火消しをするのが大変だったんです。

最後の最後、そこまで追い詰められちゃったんですね。

相本　：　この部分は記録に残っていた訳だと？　手紙のやり取りという形で？

仁ヶ竹：　はい。そういう手紙の形で残っています(『高岡市史』下巻,p717～723)。

相本　：　実際、どうでしょう、気弱になっていたのでしょうか？　それとも何か隠してたのでしょうか？

仁ヶ竹：　どうでしょうね？　そもそも入った時点では元気でしたから。ほぼゼロの状態から高岡の城下町を造ったって言いましたけれど、大変な投資と思い入れを持っていたでしょうね。

高岡城は土の上には何もないと言いましたが、土の下を発掘しますと、お城を造る前に、一旦、縄文時代の地盤層まで土をはけているんですよね。堀を掘って出た土を単に盛っただけじゃなくて、礫と言いまして、砂利～拳くらいの小石と出てきた粘土を混ぜて、叩き締めていった訳ですね。これは絶妙なバランスで強度と水はけを合わせ持つ地層です。それで大体平均数m、最大 10m以上の地盤を造成して、その上にお城を、建造物を作ろうとした。もう、大変な地盤造成工事を超突貫工事の中でもやっているんですよね。もう、それだけ見ても、大変な思い入れがあるんですね。

相本　：　そうですよね。それだけ思いと力を込めてやったけど、5 年後にはもう手放してもいいかという風になったのは、病のせいですかね？

仁ヶ竹：　でしょうかね。

相本　：　ただ、あの名古屋城の建設って、同じような時期に、徳川家から命じられたんですよね。

仁ヶ竹：　そうですね、1610 年ですね。翌年に。

相本　：　それで、お城の建設途中の石がそのまま能登の海岸に転がっている、という話を聞くんですが？

仁ヶ竹：　大人之足跡（おおひとのあしあと）って言われています。七尾市の阿良加志比古神社から海に降りて行った海岸線に、矢穴（石を割る楔を入れる穴）が沢山付いている大きな石をざっくり割っただけで放置してあるような状態がそのまま残っています。

その地域の伝承に、阿良加志比古の社殿に残っているんですけども、高岡城のために石を割ろうとしていたけども、名古屋城も作れという命令が出たので、おまえらそっちに行けと、途中で石割をやめたという伝承があるんですね。

相本　：　実際は、能登の大工や石工たちは高岡城建設、その後、名古屋城建設に向かったっていうのはよく言われている話ですから、やっぱり関係があるんですね。

仁ヶ竹：　そう思いますね。ですから、先ほどの千田先生は、当時の最先端の築城の設計理論では、もしかしたら、天下の名城とされる名古屋城に、高岡城は匹敵するんじゃないか、という風な言われ方をされております。

相本　：　因みに、皆さん調べたことはないと思いますが、高岡城本丸って、名古屋城本丸よりもちょっと広いんです。え、ほんとかよと思っているでしょう。多分、射水神社さんを本丸に入れてないんですよ。本丸広場だけ本丸だと思ってらっしゃるんですよ。射水神社さんも入れて本丸なんです。そうすると名古屋城本丸より、ちょっと広くなる。

　そこまで意識したかどうか、勿論、分かりませんけども、力の入れ方はそれ位あったということでしょうね。

仁ヶ竹：　そうですね。しかも、名古屋城は天下普請、西国大名 20 家を動員して造らせてますからね。高岡城は勿論、前田家だけで造っていますから大変な思い入れがあったということですね。

相本　：　あれだけのものを僅か 3 ヶ月位でよく仕上げたと思います。

前田利長公、火葬の謎

相本　：　因みに、前田利長公の気持ちになると、四津谷さん、どうしたかったんですかね。

四津谷：　私が凄く引っかかっていることがありまして、利長ってなんで火葬したのかなっていうのがありまして。

相本　：　ほんとだ。今では火葬が当たり前ですけども、あの時代の大名って土葬ですよね。

四津谷：　火葬にするっていうのはいくつか引っかかるところがございまして、まずちょっと、私自身、瑞龍寺の住職として言っていいかはあるのですが・・・。

相本　：　さっきからそういうのばっかり出ていますから、もう大丈夫です。

四津谷：　ここだけの話ですよ。高山右近にはあまり関係がなかったとは雖も、シンパシーは相当持っていらしたんでしょうね。

相本　：　兄とも慕っていた、とも言われてますからね。

四津谷：　ひょっとすると、洗礼はしていないだろうけれども、シンパシーを持っていたんじゃないでしょうか。

相本　：　そうですね。自分の奥さんや妹たちに、おまえらちゃんと宣教師さんの話しを聞くように、勧めている位ですからね。

四津谷：　そういうキリスト教の方って、まず自殺しないんですよ。もう一つ言うと、火葬しちゃダメなんですよ、復活しますから。ですから、ちょっと引っかかるのは、もし、ちょっと信仰心を持っておられたら、希望してなかったかもしれないですね。

相本　：　であれば、とてつもない話をしますけど、利長公のご遺体を調べたら、何か普通の死因じゃないものが分かる、可能性があるということですね。

四津谷：　ええ、普通の死因じゃない可能性、病死、もしかしたら、違う死に方かもしれませんし、色んなことが分かると、都合が悪いっていうことがあるんですね。すると、幕府にとって前田家との間に都合が悪い話と、前田家の内部で都合が悪い話が出て来るんですね。そうすると、どっちなのかなと、ちょっと引っかかるところではあります。

相本　：　確かに、瑞龍寺の住職がおっしゃるとまずいような気がします。

四津谷：　何が言いたいかっていうと、じゃあ、城を棄てるようなお殿様のために、瑞龍寺と利長墓

所を造りますか？

相本　：　利長墓所に至っては、戦国大名にとっては最高レベルでしょう、あの大きさは。

四津谷：　11.8mって書いてありますけど、本当は11.9m。これは最高に大きいんですよね。
これは、そうですね？

仁ヶ竹：　ええ、そうですね。高さというのは置いといて、面積ですよね。1 万坪、もう破格ですよね。

相本　：　そうか、今のイメージではないんだ。

仁ヶ竹：　そうなんです。テニスコートも武道館も墓所に入れられるじゃないですか、芳野中のグラウンドの一部も。正方形を描けますので。

相本　：　それを言ったら、瑞龍寺様は今のイメージどころのレベルじゃないんですよね。

四津谷：　ですからこれは、仁ヶ竹さんを否定する訳ではないんですが、文献というのはいくらでもできます。江戸時代の朱子学というのは将に、それですよね。
ですから、家康が一番分からない人だった。血の通った人か？分からない。だから、「どうする家康」って、やけに家康をちょっとアレに描いてますよね。あれがほんとの家康で、それが神君にまでどうやってなったかっていうのは、今年の大河のおもしろいところかなという気が私はします。

相本　：　ということは、利長さんはまた違うものを持っておられた。

四津谷：　いやだから、もしかしたら、さっき仁ヶ竹さんと話していたんですけど、瑞龍寺の屏風とか、あれ剝がしたら色々と出てくるんじゃないかと思って・・・。

相本　：　それこそ、あの勝興寺さんは襖を剥がしていったら、文献がいろいろ見つかってきたと分かっていますけど、瑞龍寺さんはだってもう修復の大先輩ですから、もう、襖とか張り替えているんじゃないですか。

四津谷：　いやそれはね、あの頃ね、襖やる時間がなかったんですよ。そのまま、やっちゃったんですね。

相本　：　てことは、中を見ていない。

四津谷：　もしかしたら時限爆弾になっているかもしれないよね。利長さんが、もしかしたら見るかもなって思って、襖のあそこに張っとけ。将来、誰かが、残したときに、これ出てきたら、実際、こうなんだぞって分からんかなって、思ったりもするんですけども。もろ、修復しますか？

相本　：　そうでもしてもらわないと、襖の中は修復ない限り分からないでしょう。

仁ヶ竹：　そうですね、基本的に修復は100年ごとか、それ以上ですから、まあ、それ以外にも古文書調査とか、色んな些細な史料がありましたら、是非是非、情報提供よろしくお願いいたします。

相本　：　いや～すごいですね。分からないと逆に、何点もあるってことだ。

前田利長公、壮大な築城構想

相本　：　因みに、仁ヶ竹さん、さっき色んなお城の画面で、絵図を出していただきましたけれども、みんな、かなり外側にまで何重にも堀を仕込んでいますよね。高岡城はもっと広げられたっ

てことですかね？

仁ヶ竹：　そこですよね。高岡城は、富山城のように三の丸堀までぐ～とお堀を掘って、更に、富山城のように梅沢町と布瀬町をカバーするような広大な絵図を出しました。

相本　：　梅沢町は通称、寺町って呼ばれています。

仁ヶ竹：　本当に、広い範囲ですよね、それまで囲うような総構え。上には上、小田原城なんか、大変広大な総構えのあるエリアを囲っていますけど。

多分、利長が病に倒れずに元気なままだったら、やって然るべきなんですよ。もう当然、1605 年に、利長は富山をやってますからね。

相本　：　そうか、もう隠居済みか。

仁ヶ竹：　隠居城郭に富山城を大改修したのは、利長ですから、高岡城も当然やって然るべき。

だから、城下町造成を指示した、色んな書状が残ってますけど、多分病に倒れなかったら、お堀を繋げるような、例えば、桜馬場なんかですかね。高岡台地南側が緩やかなんで、桜馬場に沿うような用水路も造りましたし。恐らく、ずっと北の方には木町とか、東はポンポン山といわれるところもありますし。あの辺まで行ったかどうかは、分かりませんけど。西の方は、横田、有磯神社、そして極楽寺さんというのも、大事なポイントですから。そこに崖があるんですよね、大千保川の東の際なんで。

相本　：　落差 2m以上あります。

仁ヶ竹：　それを、防衛に使わない訳がないですね。

先ほど言いましたが、もし金沢城が落ちたらっていう場所なので、防衛をこうやって見ると、高岡城は西を意識しているんですよね。その先の金沢城を意識していますので、二重の防衛ラインというものを西に向けていますし、西側に対する配慮っていうのは町全体を総構えみたいなものに造った可能性もあります。

相本　：　それこそ、瑞龍寺さんの周り回ってる庄方用水、町中に降りてきて、今は、川原町の方まで流れるようになっていますし。

仁ヶ竹：　そうですね。先日、「ふしぎ帖」のロケで行きましたね。

相本　：　これ自体をお堀にしようと思ったらできるんですよね。

仁ヶ竹：　そうですよね、何度も直角に曲げてますよね。明らかに、人工的に高岡台地の際に流すために。超願寺さんの境内でも曲げて、ずっと高岡城の方向に庄方用水を伸ばしてますよね。そういう、二重、三重に大きな水堀、そして段差の際に寺院を並べているっていうのは、意図的ですね。明らかに防衛ラインが二つありますので。

相本　：　今、ブルーで囲ってある長四角の部分、2 箇所(庄方用水沿いと川原用水沿い)に、利長公がお寺を連れてきて並べたっていうことですよね。

仁ヶ竹：　そういうのを活かしながら、勿論、取り込みながら、大きな総構えっていうのは、当時の常識として造って然るべきなんですよね。

前田利長公、火葬の真相？

四津谷：　だったとすると、それだけの計画を持っていたとしたら、これ、徳川、黙ってます？

仁ヶ竹：　そうですね。

四津谷：　私、そこなんですよ。もしかすると、利長が、利常が鼻毛伸ばして馬鹿を装ったとのとは違う意味で、弱虫を装ったんじゃないでしょうか。そうすると実は、本当は体も病気じゃなくて、元気だったんだけど、ええ、もうやる気満々なんだけど、実は、全然ダメなんですと言って。そうでもしないと、これ出来ないんですよね。

　でも、そうだとすると、もし実際、大阪冬の陣が近くなってきて、大御所にしてみれば、決めたい訳ですよ。俺の寿命も尽き欠けている。

相本　：　そう、家康が一番年上ですからね。

四津谷：　1614 年が冬の陣、夏の陣が 1615 年、もう一年越しなんです。もう、利長、お前、さっさと逝かねーか！って話なんです。

　でも実は、元気、やる気満々だった。でも、このまま行ったら、前田家を二つに割らなきゃいけなくなる、そうすると、これは命を縮めざるをえんわなぁ。

相本　：　なるほど。

四津谷：　そこなんか、火葬した意味が、もしかすると自分の死因を出せない理由があった、のではないかもしれませんし。

大河ドラマ「利長と利常」構想

相本　：　どうです、時代小説。

四津谷：　私、大河ドラマ「利家と利常」、できるんじゃないかと思うんです。

相本　：　おお、「利家とまつ」じゃなくて、「利家と利長」じゃなくて、「利長と利常」。

四津谷：　私、有賀亭三休という名前を持ってまして、色々やっているんですけども。三休ていうのは、噺家なんですよ。前田家の、だから一つ、私のナレーションで、大河ドラマ「利長と利常」、やりたいなと。

相本　：　それは一人 5 役くらい。

四津谷：　そしたら、瑞龍寺に七堂伽藍ができるかな。

相本　：　お待ちかねの・・・。

四津谷：　プラス、高岡城整備できるなと・・・。

相本　：　人が来ればね。

四津谷：　やっぱり、大河やる道ですよ。

相本　：　本当ですね、志の輔さんじゃありませんけど。

仁ヶ竹：　是非、その前にブラタモリをやりたいです。

相本　：　やりたいことが沢山あるという・・・。

四津谷：　まあまず、ブラタモリを・・・。

高岡城跡の分かり易い整備を！

相本　：　さあ、お二人とも残り時間が5分になりまして。じゃあ、仁ヶ竹さんから、今日、これだけはどうあっても言っておきたいということを。同じことでも結構ですので、是非。

仁ヶ竹：　そうですね、まあ、最後に言いましたけど、やっぱり、お城として分かり易い整備ですよね。特に、私、子供の頃からの遊び場所で、20 数年間通勤しておりますので、本当に、このお城の真の価値を、色んな人に、分かり易く伝えていきたい。知識がない人でもですね、お城らしさを感じるような、そういうところを整備していただきたいということ・・・。

そして、看板が足りない、圧倒的に。もう、クイズじゃないんだから。本当に、難しい上級者向けなんですよ、お城も、高岡城も、高岡の町も。解説をこれだけ懇切丁寧に、唾を飛ばしながら説明しないと、そのお城の価値が伝わらない。非常に、難しいですね。奥深い、噛めば噛むほど味が出てくるじゃないんですけど、上級者の、マニア向けのお城って言ったらそれまでなんですけど。

でもやっぱり、税金を投入してますので、広く、公平に、平等に、皆さんに分かり易くお知らせしたい。近代の絵葉書、本当に、これを参考にしていただきたいですね。土塁とか、土橋に、法面が見えるように。私、荒唐無稽な事を言っている訳じゃないんですけどね。100年前はこうだった訳で、これに戻すだけいい。是非是非、この点を強調したいなと思います。

利長の蒔いた種、文化、経済を活かすのは誰？

相本　：　それでは、四津谷さん、如何でしょう？

四津谷：　瑞龍寺というのは、例えば、仏殿なんかでいうと能登の600年の木を使っているんです。そうすると、何が想定されるかっていうと、樹齢600年の木を使うと600年もたせられるんですよ。つまり、今400年経ってる訳ですよね。あと、200年はもちます。

前田のお殿様が言いたかったのは、600年後に、まだ、残すよ。

それ位の文化、経済を、そういった強いものを、高岡の人たちに供給したんですよ、これだけのインフラ投資してやると。

勝興寺も、そうですけれども。

国宝も色々ありますけれども、これだけ素晴らしいインフラ投資をしたんだぞ。だったら、高岡のみんな、どうする？っていう・・・。

相本　：　そうでしたか・・・！

四津谷：　このまま放って、朽ちさせるのか。

これをどうやって活かすか？は、実は、ここじゃなくて、こっちなんですよ。高岡の人、一人一人がそれを考えて、行動して、広めていく。利長の狙いは、そこですよ。

相本　：　本当に、数百年の体験をきちんと仕上げなきゃいけないと！

四津谷：　私たちが仕上げなきゃいけない。

相本　：　かなり、皆さん、頷いていただいて。はい、ということで、頷いた人はやりましょう。よろしくお願いいたします。

ということで、長時間に渡りましてお話をさせていただきましたけれども、恐らくこちらのお二人はまだ、話し足りないんですよ。また、いつかの機会に是非、こういったことを設けていただければと思います。

今日は本当に、70 周年記念のこういった場に、こんな内容のステージを作っていただきまして、本当に、どうもありがとうございました。

おわりに

創業 70 周年記念講演会の企画を練り始めたのは令和 4 年 10 月頃です。11 月初旬には、講師のみな様に出演のご了解をいただきました。仁ヶ竹亮介様、四津谷道宏様、相本芳彦様、本当にありがとうございます。

事務的な諸準備を始めたのは 12 月からで、会場の確保、パンフレットの作成・配布、公募枠の募集と招待者決定、招待整理券の発送、具体的な運営方法の検討、司会者の決定と原稿作成、会場管理者側との打合せ、当日受付、等々、経理・総務グループの長谷由紀子さん、今村亜矢子さん、杉山睦美さん、辻井南緒さんには大変お世話になりました。司会役を若さと度胸で引受けてくれた辻井南緒さん、ありがとうございました。

当日、映像撮影を担当してくれたのは、広報・DX 推進室の毛利嘉那さん、引続き令和 5 年 4～8 月、音声の活字化、書籍表紙デザイン、出版段取り等を担当してくれました。根気のいる仕事を引受けてくれて、感謝しております。本当にありがとうございました。

書籍の校正は、経営責任者のみなさん総出でお願いをいたしました。

お忙し中、中尾哲雄様には、3 月 31 日当日の講演会にご参加いただき、社員のみなさんを激励していただきました。ありがとうございます。また、電子書籍として出版するにあたり、志道経営研究所を出版元とすることにご同意いただき、重ねて「創業 70 周年記念出版に寄せて」をご寄稿いただきました。ありがたく、心より感謝申し上げます。

親しい友人のみな様から、お花やお酒の祝意を頂戴いたしました。お気遣いに深謝申し上げます。

ご招待者のみな様、社員のみな様、講演会にご参加いただき、謹んでお礼申し上げます。お陰様をもちまして、創業 70 周年を目出度く勤め上げることができました。感謝！感謝！感謝！

令和 5 年 8 月 1 日

アーキジオ会長　津嶋春秋 拝

アーキジオ創業 70 周年記念講演会 書籍化出版

― 未完都市「高岡」の原点 ―

初版発行　令和 5 年 8 月 10 日

講演者　仁ヶ竹 亮介、四津谷 道宏、相本 芳彦

書籍化　株式会社アーキジオ 社長　津嶋 劍星

〒933-0824 高岡市西藤平蔵 581、Tel.0766-63-0346

出版元　志道経営研究所 代表　中尾 哲雄

〒939-8202 富山市西田地町 1-4-16